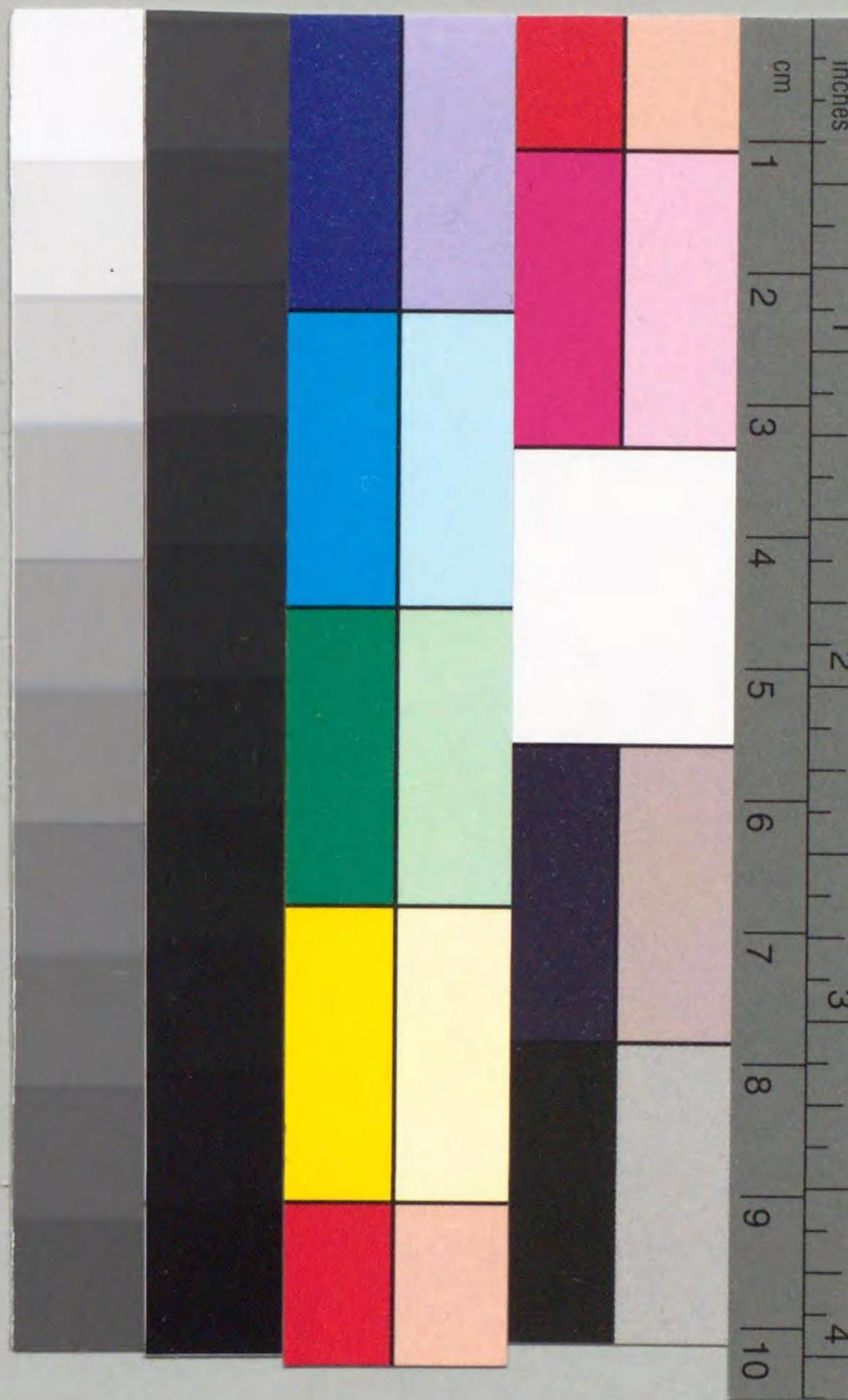




東京市立小學校兒童

震災記念文集

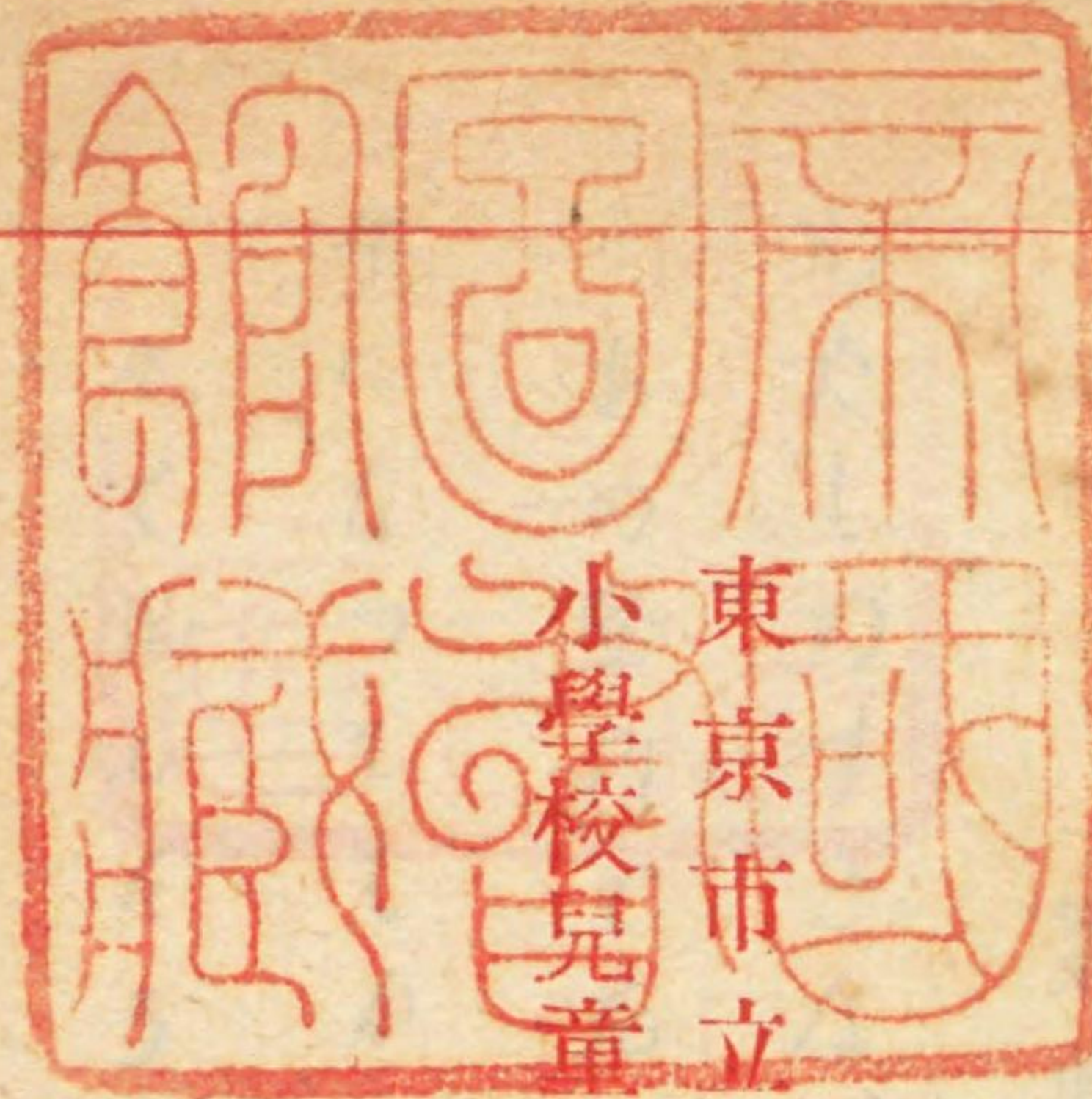
尋常四年の巻





大正
12.8.30
内記





東京市學務課編纂

震災記念文集

大正
13. 8. 30
内交



24
T-18



東京市立本所尋常小學校

震災記念文集

五大
08.8.31
交 150205

わたしの妹

中村く子

第四學年 十一歳

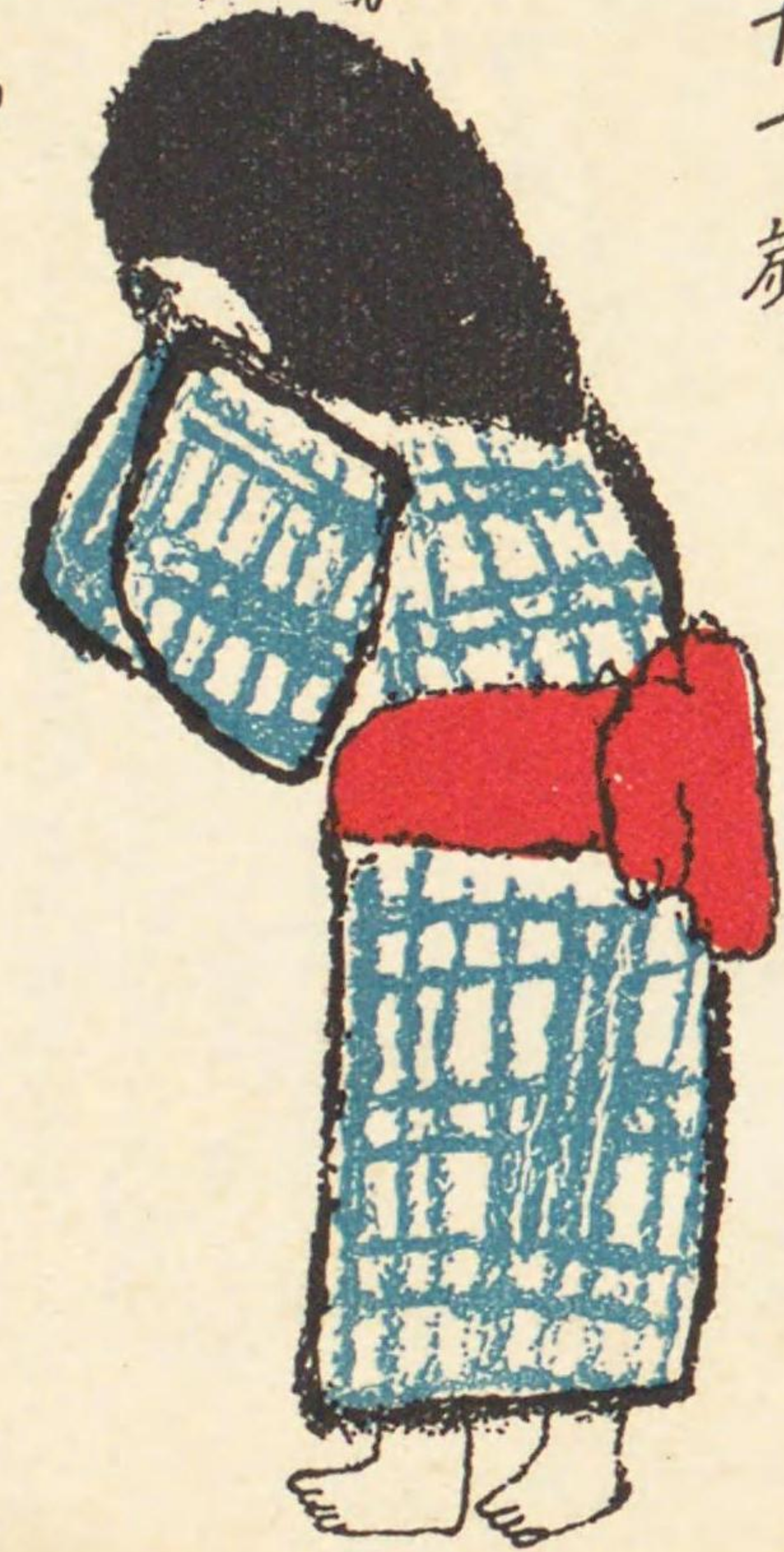
わたしのすきな妹は

あの堅川で死んだのか

今になつてもかへりない

水で死んだらくるしから

火で死んだらあつかろ



本所區 本所尋常小學校

第四學年 中村く子

序

児童は實に純真なもので、その児童の天真流露に觸るゝ時、特に偉大な衝動を受くるものである。

本市學務課は、今春震災記念展覽會を上野自治會館に於て開催し、市立小學校兒童の創作を公開した。圖畫手工綴方何れも震災に因んだもので、その出來榮は實に立派なもので、一覽かの震災が如何に彼等純真な小市民を脅かしたかと窺はれて、涙なしには到底見られぬ尊いものであつた。この尊い可憐な創作を、このまゝ筐底に納めて仕舞ふことは誠に残念に思ふので、特に綴方の部を編して上梓することゝなつた。

古來天災地變は幾度か人類を脅威し、我等の祖先はこの脅威から幾度か復興して當時の記録を残したのであるが、さて其の當時の幼者の手に成れる天真の創作を發見し得ぬ事は聊か物足らぬ感がする、しかるに常に恵まれたる現代の小市民の教養は、かの大難の體驗を叙してこの記録をなさしめた。これを永く後昆に傳ふことはあながち徒爾ではあるまいと思ふ。蓋し創作者たる小市民が後年市民として復興せる帝都に座し、この文集を彼等の兒女と共に緝くの時、果して如何なる感想を起すことであらうか。まことに好箇の記念文集といはざるを得ない。私はかゝる意味でこの小市民諸君の文集に敬意を表する次第である。

大正十三年八月十八日

東京市長

永田秀次郎

も貴重すべき震災の記録であつて、就中其の綴り方の如き、讀み去り讀み來れば、そゞるに當時の状況を回想して、到底涙なしには讀了し得られぬ底のものが尠くなかつた。

然るにも拘らず、綴り方成績物は其の性質上、圖畫手工の成績物の如く一目してこれを觀覽することの出來ぬものであるから、自然一般觀覽者も空しく看過するの遺憾を感じられたことと思はれる。乃ち茲にこれを印刷に附して世に公にし、前記の遺憾を補ふと共に、前古未曾有の大變災を永遠に記念し、長く國民教養の資に供することとした次第である。若し夫れ本市震災記念館が建設せらるゝならば、其の陳列品の一として蓋し本文集の如きは最も價値ある記念品となることであらう。

大正十三年八月十八日

東京市學務課長

佐々木吉三郎

凡 例

- 一、本書は大震災火災後、東京市學務課が主催者となつて、全市小學校兒童の精神的復興を圖ると共に、一面技能科の向上に資する目的を以て開催した「震災記念作品展覽會」出品の綴り方を全部網羅したもので、東京市内百九十六の小學校から撰拔された二千有餘の兒童の作品を、尋常一年から六年まで學年別に六卷、高等科一巻、計七巻に收めたものである。掲載の順位は出品學校の行政区順に依ることとした。
 - 二、震災記念展覽會は大正十三年三月一日の開催であるから、兒童が震災の印象を實際執筆した時は大正十二年の震災直後であるとしても、之を展覽會に出品した時の年齢は震災の年から各々一歳を加へたことになつて居る。又本書が發行された震災一周年記念日には其の學年も一級進んで居る筈である。
 - 三、技能向上の目的から、必らずしも震災に關係のない文章も、展覽會に出品されたものは全部掲載されて居る、之等のうちには主題内容の冬季に屬するものが多い。之れは展覽會が三月であつた關係である。
 - 四、口繪はその學年の兒童の作品中製版に適するものから採つたが、文章中の挿繪は印刷の都合で残念ながら全部割愛することにした、そのため行文中の説明に挿繪を用ゐたものには、多少具合の悪いところも出來たが、全部そのままにして一切添作加筆せぬことにした。
 - 五、その他、本書の校正は讀解の出來得る限り、全部原稿そのままといふことを標準にした。標題、姓名、年齢の記載法、並びに句讀、假名遣ひ等が、一巻のうちでも學校及び各兒童によつて往々區々になつて居るのは主として此のためである。
- 併し原稿轉寫並びに印刷を急いだために生じた不備な點も尠くないであらう。之は出品者諸彦並びに讀者諸君の御寛容を乞ふ次第である。

目次

【第四學年】

僕等の學校	麴町區	番町	伊丹 昇……一
震災後五ヶ月	全	氣賀 道代……二	
僕の家	全	富士見 竹内 茂……四	
月下の野宿	全	築地 道……六	
大火災	全	麴町 太田 雅啓……六	
復興の春	全	三品さみ子……八	
東京の復興	全	日比谷 及川 武雄……九	
やけ出されの人	全	荻田ハナ子……九	
すゞめ	全	上六 岡野誠一郎……一〇	
僕のすきならん	全	松宮 茂……二	
夕	全	松原富美子……三	
僕の家復興	全	永田町 村井 弘忠……三	
東京から	全	安川 節子……四	
丸の内へ逃げた	全	綿華 佐宗 美邦……六	
震災の思出	全	淡路 井上 泰吉……一〇	
形のかはつたニ	全		
コライ堂	全		
此頃の東京	全	神田區 淡路 武藤 女子……三	
震災の思出	全	神田 高橋 武伸……三	
此頃の感じ	全	千櫻 齊藤 なか……四	
私の家	全	千櫻 藤沼 福雄……五	
震災後の私の學	全	練成 武田 久子……五	
大地震大火事	全	練成 佐藤 貞吉……六	
私のおうち	全	橋本 石川 うめ……七	
九月一日	全	橋本 澤野 茂三……七	
あんまさん	全	和泉 谷 蝶子……一〇	
柳屋瀧り	全	和泉 古谷野義平……一〇	
うちの猫	全	小川 金子 津留……一三	
地震と火事	全	小川 藤本 實……一三	
震災の話	全	小川 藤本 實……一三	
九月一日の地震	全	小川 細淵 綿子……一三	
と火事	全	小川 菅野 勉夫……一三	
寒い冬の夜	全	小川 森本 君……一七	
震災後の生活	全	西小川 藤田 一雄……一七	

目次

一

目次

地震後の私共	全	神田區	西小川	中島	幸子……四〇
大正二年九月一日	全	今川	上谷	松夫……四〇	
復興の神田區	全	神龍	梅田	タケ……四三	
震災の時のこと	全	全	高橋	正男……四四	
儉約	全	全	垣内アイ子……四四		
焼けた後	全	全	大越	孝……四四	
かなしかつたり	全	全	新井	一枝……四四	
うれしかつたり	全	全	中村	喜一……四四	
震災の時のお話	全	日本橋區	常盤	寺島智恵子……四六	
震災後の町	全	全	阪本	椿太郎……四六	
大地震	全	全	久松	林精一……四六	
大地震と大火事	全	全	田中	光江……四六	
大地震火災	全	全	城東	齋藤清三郎……四六	
震災に就て	全	全	中井マサ子……四六		
未来の大東京	全	全	有島	小林孝次郎……四六	
大地震	全	全	千代田	小林邦司……四三	
黒い煙	全	全	全	全	
ほろびた都へ	全	全	全	全	
近所の朝	全	全	全	全	

二

バラック	全	日本橋區	千代田	古澤久美子……四六
震災について	全	全	十思	鈴木芳之助……四六
九月一日の大震災	全	全	石川	やす……四六
九月一日の大地	全	全	東華	谷澤 琴……四七
九月一日の思出	全	全	濱町	永守ワイ子……四七
今年の豆まき	全	全	全	藤谷彌太郎……四七
今年の豆まき	全	全	全	平井トシエ……四七
大震災のため川	全	全	箱崎	藤原 孝……四七
の中で一本を	全	全	全	全
明す	全	全	全	全
大震災大火災	全	全	全	全
學校がこれまで	全	全	全	全
になつた	全	全	全	全
この頃の町	全	全	全	全
私の家	全	全	全	全
あ、ありがたい	全	全	全	全
節分	全	全	全	全
友の死	全	全	全	全
大地震後の二三日	全	全	全	全

元の銀座	全	京橋區	泰明	香取 文……四六
九月一日のおも	全	全	全	全
ひ出	全	全	全	全
大地震の時をか	全	全	全	全
へり見て	全	全	全	全
震災の思ひて	全	全	全	全
節分の夜	全	全	全	全
大地震火災	全	全	全	全
冬の朝	全	全	全	全
焼野原も今は	全	全	全	全
濱離宮の一夜	全	全	全	全
記念の帽子	全	全	全	全
やけたされたね	全	全	全	全
ずみ	全	全	全	全
我が校の建築	全	全	全	全
九月一日の思ひ	全	全	全	全
て	全	全	全	全
震災に出あつた	全	全	全	全
私達	全	全	全	全
大地震の時	全	全	全	全
忘れられない九月	全	全	全	全
一日	全	全	全	全
焼野の東京	全	全	全	全

東京に歸る	全	京橋區	文海	山下 憲正……四六
元の學校に歸つ	全	全	全	全
相生橋	全	全	全	全
日本人の勇氣	全	全	全	全
復興のお正月	全	全	全	全
復興のお正月	全	全	全	全
森のお寺	全	全	全	全
犬の行方	全	全	全	全
一月十五日の地震	全	全	全	全
お芋屋さん	全	全	全	全
バラックへすむ	全	全	全	全
前	全	全	全	全
芝公園	全	全	全	全
九月一日の大震災	全	全	全	全
火災	全	全	全	全
バラックの人達	全	全	全	全
を思つて	全	全	全	全
冬	全	全	全	全
お友だちへ	全	全	全	全
我が家	全	全	全	全

なつかしい前の東京	牛込區	赤城	鹽谷千枝子…二〇六
叔父様へ	全	愛日	宗村 雅雄…二〇〇
復興の都	全	荒井	芳子…二〇二
大地震の日	全	早稻田	渡邊 文男…二〇三
帝都復興	全	余丁町	本橋喜代子…二〇四
大地震	全	柳澤	正雄…二〇六
下町の方から聞える音	全	山田	君子…二〇八
九月一日の大地震	全	津久戸	岩見 鑽一…二二二
才正月の一日	全	江戸川	吉崎 輝子…二二三
大地震	全	後藤	茂…二二四
大地震	全	市ヶ谷	宇佐美柳子…二二五
うぐいす	全	市ヶ谷	中桐 光彦…二二六
地震について	全	牛込	早矢仕なつ…二二九
小さな星様	全	山崎	信太郎…二三〇
バラツク	全	成富	妙子…二三三
焼跡へ行つたら	全	金子	明子…二三四
		山吹	伊藤 律二…二三五

大地震	牛込區	山吹	杉山ハツ子…二二六
初春の夕	全	長延	永森 忠正…二二九
九月一日の大地震	全	小石川區	佐久間愛子…二四〇
お守さん	全	川	荒木 村彦…二四二
私は猫です	全	明化	戸高 静子…二四三
東京の復興	全	黒田	青木 孝子…二四四
ひなん者のこと	全	柳町	倉田 剛…二四五
地震の日	全	柳町	内村 政雄…二四九
へいきな顔	全	小日向臺町	上關 恕雄…二五三
子犬	全	金富	宮島 夏樹…二五五
春が来る	全	御殿町	武田 勇…二五九
上野の山から	全	龍野	末子…二六〇
九月一日の大地震	全	青柳	本田 二郎…二六二
目ざまし時計	全		
かなしいひなまつり	全		
大地震	全		
ゆれた時	全		
大地震の思出	全		

震災當時の私	小石川區	青柳	有坂 貴代…二二七
僕の弟	全	指ヶ谷	竹松 正二…二二七
さくら吹く頃	全	大塚	猪川 敏郎…二二九
魚屋	全	花形	よし子…二七〇
お風呂で	全	駕籠町	川井 保…二七二
恐しかったあの日	全	金子	正雄…二七三
大地震を思つて	全	林町	齋藤清三郎…二七四
大地震	全	湯島	牛島 志ん…二七七
大地震と大火事	全	本郷區	湯島 平野 良助…二八〇
大地震の復興	全	誠之	村上 嘉男…二八四
地震と火事	全	坂田	勝子…二八六
恐しかった日	全	本郷	大月 一郎…二九〇
帝都復興	全	浅井	ケイ…二九二
弱い人間の力	全	駒本	松本 榮祐…二九三
帝都復興に就いて私の希望	全	富士前	工藤 新…二九六
大地震と大火災	全		

りつばな日本に	本郷區	富士前	齋藤 美喜…二九八
するかぐご	全	根津	小野 武志…二九九
大地震	全	追分	榮井万壽子…三〇二
可愛い筈子ちゃん	全	眞砂	村田 秀夫…三〇三
玄米飯を食つて	全	眞砂	天谷 敏子…三〇四
帝都復興	全	千駄木	服部 宣…三〇七
つまらないお年玉	全	元町	吉井 正彦…三〇〇
焼跡目物	全	全	小林 咲子…三〇八
九月一日の大地震	全	松岡	榮子…三一
哀れな老人	全	根岸	安本 正二…三一三
お節句	全	忍岡	相賀 保男…三一五
九月一日 (房州で)	全	練屏	森美 榮子…三一五
東京市の復興と	全	全	清水 道子…三一四
お等のかぐご	全	全	清 清…三七
一月十五日の地震	全	全	岡田 定子…三八
あ、變つた東京	全	全	桑原甲子雄…三九
静かな夜	全	全	
不安の夜	全	全	

震災後の東京	下谷區	大川 トシ...	三〇
九月一日	東盛	高嶋 力...	三一
なつかしい友か	全	芳野 邦子...	三三
見舞の返事	全	入谷 杉山 強...	三三
九月一日の地震	全	久我ひづ子...	三四
二つのおべんと	全	西町 赤坂 清綱...	三五
九月一日の震火	全	宮下 トシ...	三七
大震災火災	全	御徒町 野口 勉男...	三八
焼跡	全	内藤 清...	三〇
人々の情	全	高木 定丸...	三〇
のりうり子供	全	伊藤 良子...	三三
大震災の思ひ出	全	谷中 松原 秀輔...	三三
地震の二字	全	櫻井實智子...	三七
上野のバラツク	全	金曾木 吉井 一...	三八
九月一日	全	三島マサヨ...	三九
死んでも此の子	全	黒門 中村太郎一...	四一
さへたすかれば	全	石川 千恵...	四三
今はどぶ掃除	全		

九月一日の地震	下谷區	山伏町 大谷 巖...	四四
大地震大火事	全	矢澤 シゲ...	四四
おついたちの大	全	竹町 赤岩 良一...	四六
地震の時	全	館野 キヨ...	四九
大震災火災	全	壺東 日詰 一雄...	五〇
大地震にあつて	全	新榮 静...	五一
私のバラツク	全	龍泉 加山清一郎...	五三
大震災の思出	全	伊東 ソカ...	五五
情をうけて	全	大正 阿部 正男...	五五
恐ろしかった九	全	山本 光子...	五五
おののちそう	全	上島 義男...	五五
私の家	全	田口 ヒデ...	五五
九月一日	浅草區	待乳山 岡田 幸保...	五六
恐ろしかった九	全	岡田 四郎...	五六
復興	全	浅草 辻 嘉壽夫...	五六
私のあなかに置	全	磯貝 す...	五七
雪の朝	全	精華 柴崎 俊夫...	五七
地震の時	全	精華 森 た...	五七

豆まき	浅草區	柳北 牛込 鎮二...	三六
夜道のかへりが	全	小林 善子...	三八
春が来る	全	青英 本田 大二...	三九
人の情	全	鈴木 静子...	三九
るすゐ	全	富士 小川 好一...	三九
宮川さん	全	久保寺好乃...	四〇
煉瓦の上で	全	新堀 日比野定吉...	四〇
お話の先生	全	安西 ハナ...	四一
涙の夜	全	福井 平原 勇治...	四一
火におはれて	全	高山満壽代...	四一
大地震	全	松葉 芝田 芳松...	四一
慰問品	全	入西 初枝...	四一
震災後の心がけ	全	千束 神崎 寅吉...	四二
地震の時	全	石濱 加藤 雅子...	四三
九月一日の震火	全	鈴木 龜吉...	四四
今戸のうれしさ	全	鈴木 す...	四五
僕は十錢銀貨だ	全	小島 太田 俊夫...	四六
九月一日の大地	全	西山 文恵...	四七

大地震	浅草區	山谷堀 笠原 鶴雄...	三八
大地震と大火事	全	秋本 たき...	三八
震災火災で逃げた	全	田原 正木 陽一...	三九
震災後の私の町	全	野口 光代...	三九
私等の教室	全	金龍 谷 秀明...	三九
震災の思ひ出	全	清島 酒井美恵子...	四〇
地震の火事	全	清島 間瀬 昇...	四〇
九月一日	全	若林 君江...	四〇
ぼらつくの様子	全	玉姫 高橋 新治...	四一
恐ろしかった九	全	高岡 コト...	四一
九月一日の思出	本所區	牛島 小林清一郎...	四二
ひなまつり	全	岡本 榮子...	四四
大地震	全	明德 高野 寅治...	四五
九月一日	全	明石ヒサエ...	四七
僕はたすかつた	全	中和 澤田 慎之...	四八
復興に向つた東	全	桐山 ます...	四八
震災で死んだ家	全	本所 早川 俊夫...	四九

目次

お母さん	全	本所區	本所	久次米清子…	四三				
わたしの妹	全	全	中村	くに…	四五				
地震火事	全	全	柳島	田中小太郎…	四六				
私どもの學校	全	全	龜田	のぶ…	四七				
感謝	全	全	横川	鈴木利一…	四八				
火せめ水せめ	全	全	全	山中千代子…	四九				
大きな餘震	全	全	江東	圓城一男…	五二				
みなかに避難す	全	全	全	宮川富美子…	五三				
あなまで	全	全	全	二葉	宮下正次…	四六			
被 廠跡でたす	全	全	全	茅場	岡庭さく…	四七			
かつた	全	全	全	全	藤田喜正…	四八			
お父さんがなく	全	全	全	全	田中房子…	四九			
なりました	全	全	全	全	常峰虎之助…	五〇			
僕の家	全	全	全	全	緑	村井福子…	五三		
學校が焼けて	全	全	全	全	全	金原重次…	五四		
大震災火災	全	全	全	全	全	澤田きん子…	五五		
ト川さん	全	全	全	全	全	外手	奥村杉子…	五六	
火事でわかれた	全	全	全	全	全	全	全	全	全
友だちのこと	全	全	全	全	全	全	全	全	全
今の東京	全	全	全	全	全	全	全	全	全
たゞ一つ残った	全	全	全	全	全	全	全	全	全
観音様	全	全	全	全	全	全	全	全	全

一〇

東京市復興	全	本所區	外手	正瑞	正春…	四七			
向島附近	全	全	業平	馬場	信男…	四九			
大地震	全	全	全	須鴨	静…	四〇			
大地震	全	全	全	小梅	赤井謹一…	四二			
焼け死んだうさぎ	全	全	全	菅野	ヤオ…	四三			
大地震	全	全	全	全	坂井金太郎…	四四			
九月一日の震災	全	全	全	柳元	田中芳子…	四六			
大震災	全	全	全	全	田中	芳子…	四六		
震災と私の内	全	全	全	全	山田	正一…	四八		
初雪	全	全	全	全	三笠	山田	正一…	四八	
火事と大地震	全	全	全	全	全	羽島美音子…	四九		
大地震と火事の話	全	全	全	全	全	菊川	菊地理一…	五一	
大震災	全	全	全	全	全	大平	夏見信次…	四四	
照出	全	全	全	全	全	深川	小船清…	四五	
バラツクの様子	全	全	全	全	全	全	赤堀	杉子…	四九
お知らせの手紙	全	全	全	全	全	全	浅井	豊…	四〇
バラツク	全	全	全	全	全	全	荒井マサ子…	四二	
僕等の教室	全	全	全	全	全	全	山田甲之助…	四三	
大震災	全	全	全	全	全	全	吉田	榮一…	四三

目次

九月一日	全	深川區	東陽	角張	年孝…	四六								
九月一日の大震	全	全	全	和田	チエ…	四七								
地震の夜	全	全	全	六間堀	黒田初太郎…	四九								
地震の夜	全	全	全	全	出野	壽美…	四七							
大地震	全	全	全	全	弱橋	館林喜一…	四七							
九月一日	全	全	全	全	早川	さく…	四七							
悲しいく大東京	全	全	全	全	臨海	五木田正夫…	四四							
震災の思出	全	全	全	全	全	鈴木	ゆき…	四五						
弟の死	全	全	全	全	全	元加賀	丹羽倉二…	四六						
大地震と大火事	全	全	全	全	全	全	長繩	し子…	四七					
大東京	全	全	全	全	全	全	數矢	柳田	武雄…	四九				
九月一日を思ひ出して	全	全	全	全	全	全	全	池田	きみ…	四八				
震災後	全	全	全	全	全	全	全	八名川	片山	良雄…	四二			
大地震	全	全	全	全	全	全	全	全	松本	くめ…	四三			
焼けあとのおけ	全	全	全	全	全	全	全	全	川南	井上	豊久…	四四		
バラツク町の夜	全	全	全	全	全	全	全	全	全	細川	つね子…	四五		
まだ見ぬ友へ	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	篠原	美代子…	四五	
アメリカのまだ見ぬ友へ	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	石倉	志津子…	四七

恐ろしの一夜	全	深川區	明治第二	吉川	セイ子…	四八					
私の教室	全	全	全	全	靈岸	兒玉福之助…	四九				
バラツクの家	全	全	全	全	全	木村	さかゑ…	四九			
震災後日物語	全	全	全	全	全	全	猿江	田中	梅吉…	四一	
震災後	全	全	全	全	全	全	全	全	利谷	フサ子…	四三

僕等の學校

麴町區 番町尋常小學校

第四學年男

伊丹

昇 (十二才)

(一)

僕等の學校火でやけた
今は復興まつさいちう
家がたつたつ家が建つ
大工がかんかんならしてる
あちらでかんかんこちらでかんかん
今に日本一の小學校
早くたてたて番町學校

(二) 日本一の番町學校

今は工事のまつさい中

ばりきの出入りかづしれず

皆働くは働くは

鐵きんコンクリートでやけなくて

いばつてゐられる番町學校

早くたてたて番町學校

震災後五ヶ月

麴町區 番町尋常小學校

第四學年女

氣 駕 道 代 (十二才)

九月一日の大地震と大火事とで私達は住み馴れた芝の家を失ひ麴町五番町の親類へ立ちのいた。火事の時出した荷物を車に積んで其の後から、私達はよごれたゆかたを着て、電車道をどん／＼歩いて麴町のをぢ様のお家へ着いて、始めてほつと一息ついた。それからは、をぢ様とをば様の御親切で、普通の焼だされの様な不自由もしない

ですんだ。

それから五ヶ月の後、今ではまるで違つた東京になつて居る。その頃は焼け跡の焼け土が少しも片づけてなかつたのが、近頃ではすつかり片づけられて、その跡にバラツクが立てられた。皆元住んで居た様なりつばな家ではないそまつな家であるが、人々は其のバラツクにはいつて、帝都復興の爲にそれ／＼の仕事にはげんで居る。

まづ九段坂の上から、神田方面をながめると、私が五番町の親類へ立ちのいた時すぐ見た神田とはまるで違つて、これがあの焼野原だつたかと、うたがはれるやうに、ぎつしりとバラツクが立ち並んで居る。

又震災の頃は、水道、電氣、ガス等が、通じなかつたが、近頃では、すつかり震災前の様に何にでも便利になつた。たゞ電話だけは、通じない所が、大分多いが、皆一度に復舊出来ないから、がまんしなければならぬ。震災の頃は、らうそくの光りて、夜は色々の用事をして居た事を思ふと、電氣を附けて、その明るい所で何でも出来る様になつたのは、ずゝ分便利な事である。

又震災後しばらくの間は、戒嚴令がしかれてあつて、皇族方のおやしきや外國の大使館の門の前には、番兵が鐵砲をかついで番をして居たが、十一月頃から廢された。

それだけ世間が落ついて来たのである。

私達は今では、目白のおぢい様のお家にゐる。こゝに來たはじめは、電氣が度々きえると、らうそく立が火事の時だしたのが一つしかないのでもまことに不便であつた。その外様々の物は、皆買ひ揃へた。又學校の御本等もすべて焼けたが、先生にいたり買つたりしたから、皆揃つた。少しも近頃では不自由をかんじない。

私はバラツクを作るつちの音が、聞えても少しもうるさくない。又ガスや水道の爲に、掘るぬかるみもきたないとは思はない。さういふ事が東京の復興の爲めになるのだと思ふとかへつてうれしい。

私は東京が元よりつばに復興するのをまつてゐる。

僕の 家

麴町區 富士見尋常小學校

第四學年男

竹 内

茂

僕の家は九月一日の大震災火災のためにどう／＼やかれてしまつた。苦しかつたのは、家をやかれたため屋根も天ぢやうもない所にひなんした時である。四日には荷物自動

車に乗つて、ゐなかへ行つてしまつた。僕の家は大工がたのめないで、親類のおぢさんや家のお父さんが建て、下すつた。おぢさんの家には大工の使ふ道具があるので、それを東京に持つて來た。材料は皆親類から持つて來た。材木は青梅の親類から馬力ではこんだ。とたんは何でも八王寺の親類からやはり馬力ではこんだ、と言ふ話だ。それでおぢさんたちは僕らのひなんしてゐたごて内に、たゞみをひきそこに泊つてすこしづゝ建て、下すつた。

家は九月二十日ごろ出來た。僕らは九月二十九日ごろ東京のばらつくへ歸つて來た。その時はまだ天ぢやうもはられてゐなかつたし、戸じまりもまだよく出來てゐなかつた。その上せまくてねるにもべんきやうするにも、ま事に不便であつた。今ではもう天ぢやうもはれてかなりよくなつた。これから裏へ二階屋を建てるので、此間から大工が入つてゐる。二階屋が出來れば僕の家も廣くなつて、用をするにもべんきやうをするにも、又妹や弟が遊ぶにも便利である。僕は早く二階屋が出來て廣くなるとうれしいと思ひながら、二階屋の出來るのを待つてゐる。

月下の野宿

麴町區 富士見尋常小學校

第四學年女 築地 道

おそろしい地震と火事の爲に住みなれた自分の家も見すてて、どこかに宿をもとめねばならぬことになつた。父と母と兄弟三人はお役所の人々といつしよに代官町の舊氣象臺跡の草原にたどり着いた。その時はちやうど夜中の二時頃であつた。

遠く町の方からは建物のたはれるおそろしい音と人々のわめく聲とがきこえた。ようやく持つて来た二三枚の小さなふとんをつゆ深い草の上にしいてやすんだ。空は四方から上る火事の煙でおひかぶさるやうであつたが、宮城の森の上には月がしづかにすみ渡つてゐた。

目をさましたのは五時頃であつたらうか、まくらもこの櫻の木にはいつも聞くやうなせみの聲がきこえて恐しかつた。昨日の事がゆめのやうに思はれた。

大火災

麴町區 麴町尋常小學校

第四學年男 太田 雅啓 (十一才)

九月一日の大震災火災で東京は焼野の原となりました。僕の家も其の焼けた所の一つであります。火元は中六番町で、まさか麴町四丁目の僕の家の方迄は、もえてこないと思つてすいぶんゆだんをしてゐました。よく二日、火はどうも麴町一丁目の方へもえて來ました。いくらもえても向ふはおほりだから止まつてしまふと思つてゐたのです。所が急に風が變つて、僕の家の方へと、もえて來ました。さあこうしてはゐられないと、ごん／＼荷物を運び出した。まず、荷物を六丁目の坂の所へ置いた。火はごん／＼もえてくる。いよ／＼荷物を出した所も危険になつたので、ふた／＼び荷物をせをつて、伏見の宮様へと出した。少しこゝで落つた。やがて僕の家へも火がついた。しや／＼とすごい音をたて、焼けて行く、あの時の光景は何ともいへなかつた。火事は幸ひに、六丁目で止まつた。今でもなんだかしくやくにさわつてしやうがない。伏見の宮様前へ二晩野宿した。火事もやんで、あたりはやう／＼少し静になつた。幸ひに半藏門の麴町高等小學校が焼けなかつたので、そこへ入れてもらふことにした。そこで又荷物をかたにせをつて高等學校へと持つて行つた。悪い事に雨がざあ／＼降つて來た。父さんや母さんが一つしやうけんめいに荷物をせをつて持つて行く、僕は宮様の方の番です。僕が一人で雨の降る中を番してゐた、あの時はまつたく僕の口や

筆ではとても其の實況は言ひあらはす事が出来ません。思へば思ふ程悲惨な事でありました。

復興の春

麴町區 麴町尋常小學校

第四學年女

三品とみ子 (十一才)

すゞしい氣持のよい春風は、灰になつた帝都の上をそよ〜となでる様に靜に吹いて、小さい草花は芽をもたげ小鳥はのきにさえづる春がおとづれて來ました。

帝都はこの楽しい春にも、寒い冬にも、皆あせみごろになつて復興へ〜と、急ぐのでした。

そしてでこぼこになつた所は平にし家をたてて學校も作り、電車のせんろもなほし、焼残つたれんがをごりのけたり、瓦のかけやごみなども取のけたりして、復興に急いでをります。

私たちは一人前の事は出きませんが、できるだけ力をつくして帝都のため自分のためにつくさなければなりません。一つしようけんめいになつて……………

東京の復興

麴町區 日比谷尋常小學校

第四學年男

及川武雄 (十年六ヶ月)

まる焼けに焼けた東京も今ではりつばな東京となつて家もだんだんできてきた。道ばたで商賣をしてゐる家がついぶんある。そのほか電車や自動車にぎやかになつてきた。人は両がはをぞろ〜と歩いてゐる。こうしてだん〜と東京はりつばになつてくる。父母もいつしようけんめい働いて今ではバラックにゐるがこんどは本當の家をこしらへなければならんといつてゐる。

やけ出されの人は

麴町區 日比谷尋常小學校

第四學年女

荻田ハナ子 (十年十ヶ月)

やけ出されの人は今年のひな祭をどう思ふでせう。私はきつとさびしい祭だと思ふにちがひないと思ひます。おひな様がなくて、さびしいと思ふでせう。あつても毎年

かざつてよろこんだのところがつてゐて、見なれないおひな様なのでつまらないと思ふ方もあるでせう。

この間報知新聞へ名前はわすれましたが、五年の方がつくつた綴方が出てゐました。その中に『私のおひな様をなめつくした火が、にくらしい』と書いてありましたが、もつとも事だと思ひます。

又やける時、だいら様だけは出して、今はかなしいお母様お父様のかたみとなつた方もあるでせう。

けれどもこのさびしいおひな祭が昔話の一つになる時もあるだらうと思ひます。いやきつとあると思ひます。

す め

麴町區 上六尋常小學校

第四學年男 岡野 誠 一郎 (十才)

毎朝起きて見ると裏のまつの木へ来て、ぴいぴいと鳴いてゐる、あの雀は毎朝早くからゑをさがしに行くのであらう。

又ひるまになると、十羽ぐらいではりのそばの木にとまつてゐる。

すぐめを見るとかはいらしい。そのかはいらしい雀も九月一日の大地震のために、さぞびつくりしたであらう。

僕らだつてもびつくりしたんだもの、すぐめはよくはたらいで夕方になると、いそいで自分のやどへかへる。

僕のすきならんの花

麴町區 上六尋常小學校

第四學年男 松 宮 茂 (十才)

僕のすきならんの花、毎日朝と夕方に水をやつた美しいらんの花。

又學校から歸つて來るとすぐ水をやつたらんの花は、九月一日の大地震のあつた時に、火事のさわぎで、荷物をはこぶ時にふみつけてめちやく／＼にしてしまつたらんの花。

今思ひ出すと、をしくて／＼たまりません。今さがして見ても花のすがたが見えない。

春になつてきれいな花が咲く、そのきれいな大きな紫色の花も見ることが出来ない
今だにそのことを思ひ出す。

夕

麴町區 上六尋常小學校

第四學年女

松原 富美子 (十一才)

遊びつかれた體を芝生によこたへた時は思はず大聲でさげんだ。

『あゝ美しい』

もえるやうな赤い／＼色をした夕日は、今向ふの森にしづまふとしてゐる。ふと頭に
うかんだのは、おそろしい九月一日の震災の時のあのろひの火である。あのおそろし
い火の色は、今日の前に見てゐる夕日の色と同じなのだ。ざんこくな火に追はれてに
げまごふ避難民の聲が聞えるやうである。夕日は次第々に森の向ふにかくれてゆく。
あの時私の心は恐しさで一ぱいだつた。お母様の手を引いて靖國神社の廣場へにげ
たのもこわい思ひ出である。家やはしらのもえる音、材木のたほれる音、人々の大聲
でさげぶ聲、それらが一つしよになつて夜の空にひゞき渡つた。『おゝこわい』

東京は大部分震災で灰になつたが、私たちは力を出して、元の東京よりずつとく
りつばな東京にしてみせやう。

氣がついた時、もう夕日はしづんだ後であつた。あたりは人のすがたもはつきりと
見えない様に夕やみに包まれてゐた。

僕の家の復興

麴町區 永田町尋常小學校

第四學年男

村井 弘忠

九月一日におこつた大地震大火事で、東京中の町が大てい焼けてしまつたのに家だ
け残つたのは何たる仕合せであらう。見上るやうにたかい石がけもくづれなかつたし、
まわりの木も一本も焼けなかつた。……あをい橋の方から山王の下をなめつくした
火がすぐ下の△△さんの所へ來たときは、もう家も助からぬとかな念したのであつた
が……そのとうじは、げんまいめしでずいぶんなんぎな思ひをしたが毎日ではせい
たくを言ふやうになつた。

家のかわらのおちたのも、かべのわれたのも、地面にひびがいつたのもなほしてし

まつた。方々にある銀行もみな焼けるし、してん長もしんだが、今はりつばなバラックで大せいの人が、いそがはしく事務をとつてゐる。

西洋かんは帝都復興院にかしたので自動車が一日に何だいとなくやつて来る。くらのたから物もあまりこはれなかつた。

なつがすつかりかたづけたから、もどほりになつた。火事の時くらのまごにそこらにあつたごろをなすりつけた事を思ふとおかしくなる。鳥のすみにたつたバラックには、ぼうえき會社や他の會社がはいつて居る。僕は時々切手を取りに行きます。鳥は青々して氣持がよい。梅の花もそろ／＼咲くだらう。

くらから見下した焼けの原も、もうあたらしいトタン屋根の家がたちならんで居て誠に美しい。

かうして大東京が一日々々と復興していくのを見ると、うれしくてたまらない。

東京から

麴町區 永田町尋常小學校

第四學年女

安川節子

寒いさかりもすぎて、梅の花がちらほら咲き初めました。あの恐しい大震災、大火災で焼野原となつた東京も、皆が力を合して復興に急いだので、今はほとんどバラックでうづまつてしまひました。銀座通などは色々な美しい商店が少しのすき間もないほど立ちならんでゐます。伯父様がこんなに復興した東京を御覽になつたら、どんなにお驚きになり、又お喜びになることせう。私の學校は幸にして焼残りしたので毎日通學してをります。焼けた學校もあらかた建ちましたが、私達のやうな焼けない學校にくらべると、何かと不自由がちでお氣の毒です。

それを思ふと焼けない學校に通つてゐる私達はほんとに幸福だと思ひます。私どもはもつと／＼勉強して大人になつたら、この東京を前の東京よりも、ぐつと美しい、地震などに破壊されない、りつばな東京にしようと思つてをります。

伯父様暖かになりましたらこの復興した東京を、御見物にいらしてくださいませ

さよなら

丸の内へ逃げた時

神田區 錦華尋常小學校

第四學年男

佐 宗 美 邦

思ひ出して恐ろしい震災のために、男の子は一しよに、後で聞けば父母たちは、隣のおちさんと一しよだつた。三番目の兄と、僕と弟はお湯屋の人の車の後ろへ附いて行つた、学校の道具をかゝへて逃げた。だが僕の家が、焼けるとは夢にも知らない、神田橋まで来ると、橋はすでに焼け落ちて居た。仕方無しに遠廻りをして、神田橋の裏通りへ出た。ひなん者は、あたりに皆ござをしいて居た。どの顔も青い驚いた様である。お湯屋の人達はこゝなら大丈夫と、そこに置いてある、砂利の上に荷物を下して又家に歸つた。しばらくの間は火の手を見て居た。西洋館の家々の窓から、火や黒い煙を出して居る様子は、實に物すごい。だん／＼父母の事が頭に浮んで来る。弟も心配らしい様子をして居る。しまひにワツと泣き『お母さん／＼』と、悲しそうな聲を出す度毎に胸が、どつき／＼する。なぐさめたけれども中々聞かない。ちやうど一時間程立つと、又お湯屋の車が見えた。その後には一番上の兄が附いて来た。僕は大きくうれしかつた、兄も弟をなぐさめたので、やうやく泣き止んだ、これと同時に、風向きが變つて、一時にとつと火が煙と共に僕等の居る上にかぶつて来た。『こりやあ大へん!!』と又も車を引いて、煙の中をくゞつて、丸の内の近い所へ来た。日はいつし

か西へしづんで行つて日光は、おほりの水を赤く染めて居た。前の大藏省にも火が附いた。見る／＼内に、バラバラ、ずん／＼とすさまじい音と共に、あの大きな屋根が焼け落ちた。風は向ふの方へ行くので『まあ安心』とそこへ荷物を下して休んだ。

夜の八時頃であつた。おほりの向ふ側から火の粉が雨の如く飛んで来て、おほりの中へ落ちてはち／＼と音がする。其の様は何んとも言へないほど物すごい。一つの大きな火の粉が車に、積んであるお湯屋のふとんに落ちた、『それ大變だ水をかけろ』と言つて、おほりから汲んで来て、ふとんの中へつぎ込んだのでやうやく助かつた。さうしてやなぎの枝を折つてめい／＼手にもつて火の粉を防いだ。するとおまはりさんが、『それ丸の内へ逃ろ／＼』と言ふがどうしても、二だい車がなくては行く事は出来ない。仕方無く残つた荷物を地上に置いて、車を引いて僕もその後へ附いていつた、焼けた家々の前を通ると、荷物の焼けて居るのも見た。丸の内へ着いて、又引きにもどつた。さうして荷物は皆持つて来る事は出来た。お湯屋のおちさんがその時をむすびを、たくさん持つて来たので、やうやくおなががふくれた。いつしか月光は、ひなん者の顔を照して居た。まよひ子を呼ぶ者あり。竹ざをに着物をかけて、人を尋ねる人もある。僕等はそこでふとんをしいてねてしまつた。三時間もたゝぬ中に目が

さめた。兄と、次の兄が居ないのでお湯屋の人に聞くと、「日比谷公園へ、水を取りに行つた」と言はれた、弟もむく／＼起きて来て、赤い日の出を見て、喜んで居た。兄さんたちもそこへ歸つて来た。僕は父母の事が心配でならない。今時分なくなつて灰になつて居るかと思ふと心配でならない。兄さんがそれでは家の焼け跡へ行けば、父母の居る場所がわかると言つて行つた。すると兵隊さんが十時頃軍用パンを下さつたので、すい分食べた。しばらく立つとお父さんと、おぢさんが来た。僕たちは涙ぐんで喜んだ。お母さんとは聞いたから、「皆無事だよ」と言つたので、二度喜んだ。さうして牛込の親類で、家中一同揃つたのは二日の夕方であつた。

震災火災の思ひ出

神田區 錦華尋常小學校

第四學年女

福田 光代

あゝ九月一日の大地震、今思へばこわくはないがあの時はすいぶんこはかつた。私の家では晝御飯がすんでお友達か三人遊びに来て、おはじきをして居た、すると突然に大地がぐら／＼と、ゆれるので皆は、『あつ地震だ／＼』とさげびながらテ

ーブルの下にかけこんだ。

その中に、『がたびし／＼』と言ひながら物すごい音を立て、家がつぶれた。

皆は『あつ』とすけて』と夢中で聲をかぎりにごなつた。

その時お父さんが外からゆか板をはがして下さつた。

外へ出て見ると大ていの家はつぶれてゐた。その中にあたりはもう／＼として火が上つてゐた。

お父さんとお母さんはいそいで少しばかりの荷物を出した。私はただ『ぶる／＼』ふるえてゐた。

それからお父さんとお母さんと三人で、商科大學へ行つてきじ橋から近衛の二聯隊へひなした。

だん／＼日は暮れてあたりは一面火の海となつた。

からだまでじり／＼あつくなる。私はこゝで死ぬか生るか、二つの一つと思つてじつとがまんしてゐた。

其の時は氣もくるはんばかりにおそろしかつた。

其の中に夜もしら／＼と明けて来た。

あくまの舌のやうな火もだんだんとおとろへて来たので、私達は四ッ谷の親類へいそいだ。
をばさんにあつて、おむすびをいたゞいた時は、何ともいへずうれしくおいしかつた。

あの九月一日は、今でもわすれる事が出来ない。

形のかはつたニコライ堂

神田區 淡路尋常小學校

第四學年男

井上 泰吉

かたちのかはつた

ニコライ堂

あたまがおちた

ニコライ堂

かたちがかはつちや

かなしかる

あたまがおちちや

あめがふつても

いたからう

かさはない

ゆきがふつても

づきんがない

此頃の東京

神田區 淡路尋常小學校

第四學年女

武藤 文子

一生忘れる事の出来ないあの恐ろしかつた九月一日の震災で、世界でも指折りの大都會も一時は焼野原となつて、さびしい片田舎よりもまだ／＼さびしい東京となつてしまひました。

僅の時の間にあんなにひどくならうとはゆめにも思ひませんでした。

その後二三ヶ月たちます中に焼野原の東京には驚くほごたくさんのバラックが立並び、今ではもうすつかり前のやうな、又にぎやかな東京となつて、電車自動車はいつ

も大こんざつで、道行く人の足もいそがしくいかにも復興の有様をあらはして居ります。唯悲しいのは前のやうな高いりつばな建物を見る事が出来なく、大ていはとたんやねの平家か二階家ばかり立並んで居るのが、あの忘れる事の出来ない震災を物語つて居るやうでなりません。

震災の思出

神田區 神田尋常小學校

第四學年男

高橋

武伸(十二才)

大正十二年九月一日のお晝頃、急に大地震が來ました。其の日は大そうなま暖い日で、人は皆雨が降るなどと言つてゐました。するとその大地震で瓦が落ちる、家がつぶれる、人は死ぬ、それは大さうのものでした。その地震がやんだので安心して外へ出ると、まさやのうちがつぶれてゐました。すると今度は火事のさわぎ、ほら本石町だ、けいしちやうだなどと、屋根に上つて見てゐる人もあれば、もう荷物をせ負つて逃げる支度をしてる人もある。お父さんは風呂敷にふとんをつんで自轉車につけて一つ橋へ先に逃げました。僕たちはお母さんに連れられてござをもつて、ざぶとんをか

ゝへて、ぼうしをかぶつて、かばんをかけて神田橋のところへ行きました。人ごみで中々一つ橋の方へは行けないと思つて又家へ歸つて來ました。するともう青年會の中へ火が附いたらしい、煙が家へ入つて來たので、おどろいてまた家を出て、神田橋へ行きました。左がわの方で何だかぼん／＼はれつをする音が盛に聞えます。おまわりさんは電車の屋根の上に乗る大きな聲で一つ橋へ行くと女や子供はふみ殺されるぞと言ふので、僕たちは今にも落ちさうな神田橋を渡つて両方の家は焼け、電車道には電車がもえてゐる所をかけてとほりの近くに來た。それからやなぎの下でござを敷いて一休しました。

もうその時はのどがかわいてしまつたので水をもらつてのみました。それから和田倉門の中へ入りました。そして草の上でござを敷いて、出しただけの着物をかけてうつとりと一ねむりしました。うしろを見ると盛んにもえてゐます、僕は神様にどうぞ家が焼けないようにとおいのりをしました。弟たちはつかれたとみえていびきをかいてねてゐます、僕もそのうちにうと／＼とねむりはじめました、其の晩はあかるくてろうそくもいらなくらゐりました。あゝ九月一日のその日は實にこわい思をして暮した。今思ひ出してもぞつとします。

此の頃の感じ

神田區 神田尋常小學校

第四學年女 齋 藤 か ろ (十一才)

此の頃はバラックとは言ひながら仲々よいふしんをしてゐる家があります。そして良
いおしたくをしてゐる人もちよいと見えるやうになりました。もうあの人は九月
一日の苦しみを忘れたのでせうか。

私は玄米を食べたり、よその内へとめていたゞいたり、電車道のへりにねたりした
ことを思ひますと、こんなきたないバラックに居りまして、雨風の吹くたびごとに
ありがたいと思ひます。

私はいつまでも、あの時の事を忘れないでけつしてせいたくはしまいと決心して
居ります。

私の家

神田區 千櫻尋常小學校

第四學年男 藤 沼 福 雄 (十二歳)

私の家は思ひ出すへおそろしい九月一日の大地震災のためにあとかたもなくなり
ました。今では、こんな小さいバラックの家に住んでゐますがこの火事の事を思ふと
後から、おそろしいことが目にうかんで來ます。私は震災前にはいろいろな本や
ざつしなどをたくさんにもつてゐて、こうふくに生活してゐましたが、今度の大地震災
のために根本からくつがへされてしまひました。教科書にさへ不自由してゐます。私
は一そうつとめはげんで立派な大東京をつくり上げたいと思つて居ります。

震災後の私の學校

神田區 千櫻尋常小學校

第四學年女 武 田 久 子 (十二歳)

私の學校は元はりつばな三階づくりであつたが、九月一日の大震災の爲に見るかけ
もないあはれな物となつてしまつて、毎日お友だちとあそんだ運動場も罹災者のバラ
ックでいつぱいになつてしまつた。今ではそのバラックのあいてゐる所へ入つて勉強
するやうになつた。おかげで長い間はなればなれになつてゐた、お友だちや先生にも

あへるやうになつた。バラツクのきようしつは大へんに床がひくくして其の上になつた一枚のアンペラをひいてすわつてゐるお机はあき箱やあきだるをだいにしてその上に板を二三枚おいたきりであるから少しもたれるとおれさうになる、又おとなりのへやのさかいがわづかにしふ板一枚たゝせたきりなので勉強してゐる聲などがよく聞える、先生のお使になる黒板もブリキにコウルタをぬつたきりなのである。私はこんなあはれな學校でも一生懸命勉強して元の學校よりりつぱにして神出一番と言はれるくらいりつぱな學校にしようと思つてゐる。この間から學校のバラツクを大せいの大工さんが来てたてはじめた。私は早く學校が立てばいと、そればかり毎日思つてゐる。罹災しない學校を見ると元のりつぱな學校が目の前にうかんで来てならない。

大地震大火事

神田區 練成尋常小學校

第四學年男

佐藤 貞吉

九月一日、學校から歸つて二階へ上つてゐると、『ゴハン』と云ふ聲が聞えた。急いではしごを二三段下るとぐら／＼と動き出した。

はしごが五六寸もづれた、後一二分ではしごが落ちる所だつた。僕ははしごを下りてただなの所へかけていつた。その時又ぐら／＼と動いて神様の花さしがバタリと落ちた。御幣が落ちるやら御水がこぼれるやら、大へんだつた。僕はたまらなくなつて外へとびだした。電車道には大勢の人がずつと並んでゐた。つづいて又ゆれ出して電線が二すぢ真中から切れてぶらさがつた。

南、宮城の方に當つて黒煙が上つた。西の方本郷からも煙が出てゐる。その中に向ふからかけて来た人が順天堂へ火がついたといつてゐた。その時は人々は荷物を出してにげる用意をしてゐた。

時々『ドン／＼』と音がする、又『グラ／＼』地震が来る。

私のおうち

神田區 練成尋常小學校

第四學年女

石川 うめ

(一)
わたしのおうちはどこへいつた、

こわれてやけて灰になり、
かりにたてたる私のおうち、
ほんどに小さいバラックよ。

(一一)

雨がふればぼちよ／＼と、
ねてゐるふとんの上までも、
落るたびごとに眼がさめる、
ほんどに苦しいバラックよ。

(一二)

今は小さいバラックに、
今は苦しいバラックに、
一生けんめい働いて、
つばなお家をたてませう。

九月一日

神田區 橋本尋常小學校

第四學年男

澤野 茂 三 (十三歳)

ああ、九月一日は何と言ふ悪日だらう。其朝學校の始業式からかへつて来て、二かいで一生けんめいに手工をやつてゐた。十二時近くに出来上つた。これをあさつて先生にお点をつけてもらふと思つてゐた所あの大地震はほんどに僕は生きた心持はなかつた。僕はすぐたんの下へよりかかつて、弟に『あぶないからこゝへおいで。』と言つた地震はます／＼ひどくなつて、今にも内がつぶれるくらい、どうしてよいかさつぱりわからない。すこしたつて地震がゆるんだ。お父さんは『そこがいい。』と言つた。僕はそとへ出た。出て見ると驚いた。家々のかはらが皆おちてゐる。其内に火事は方々から出た。地震は何度もゆる。火事はだん／＼と町をなめてくる。人々は皆生きた心持はない。ひなんをする人は道一ぱいで僕はどうなる事かとしんぱいでたまらなかつた。此の地震や火事で死んだ人は十萬以上もある。まことにかはいそいな事である。僕の家は皆ぶじであつた。この九月一日を思ひ出すと今でもおそろしい氣持がする。

あ ん ま さ ん

神田區 橋本尋常小學校

第四學年女

谷

蝶 子 (十二歳)

震災前私の内へお酒を飲みに来るあんまさんがある。名は源ちやんと言ふ、家は私の家のそばである。毎日家へお酒を飲みに来て歸りは私が向がはまで手を引いていつて上るときまつてゐる。

九月一日の大震災の時やはりその家のおくをかりてゐるおばあさんが私たちが外で眞青になつてゐる時かけて来て『源ちやんはどうしませう。』と言つたのでお父さんが、『兄さんの所へ連れていつた方がいゝでせう。』と言つた。おばあさんは源ちやんを兄さんの所へ連れて行つた。

震災後内へ来るお客様が皆源ちやんのうはさを言つてゐたが誰もみんな源ちやんは死んだ／＼と言つて、生きてゐると言ふ人はなかつた。毎日／＼源ちやんの兄さんの家の焼あとへいつては見て居るがなか／＼立たない。又行つて見ると立て始めてゐた。或日お父さんが家を尋ねて行つて源ちやんの事を聞くと生きて居る、と言つた。

そして、お父さんの聲が聞えたと思つてをくの間に出来たと言つた。

目明がたくさん死んだのに目くらが生きてゐる、と言ふ事だから目明は大そう不自由な者である。

柳 原 通 り

神田區 和泉尋常小學校

第四學年男

古 谷

野 義

平 (十一歳)

私が柳原通りを通りかゝると、この店でも『いらつしやい／＼』と云つてゐる。お客様がはいると『毎度有りがとうございます、なにをさしあげませう』『これはいくらですか。』『そうですなこれは二十圓でねがつてをりますがとくにべんきやうして十九圓五十錢でいかいでせう。』『それではあまりたかすぎる。』

『それではいくらならよいのでせう』

『十八圓五十錢でなくては買はない』
『じょうだんでせうあんまりからかつちやいけません。これは十八圓位の品物ではありませぬ』『それでは歸へらう。』と言つて歸らうとすると『まけます／＼。』と言つて

とう／＼まけました。お客はお金をはらつて歸りました。

うちの猫

神田區 和泉尋常小學校

第四學年女

金子 津留 (十一歳)

いつもの通り玉の、ねば所へ行くと、尾をたて、よろこんでとんでくる、玉とよぶとにやあと返事をする。知らない人がくるとおこる。おこるときはきつとせなかをまるくして毛をたてる。其のやうすは實におかしい。小さい子がからかふとばかりにして、くひつく、うちのお母様が、しかると耳を横にして、首をすくめる。あまつたれるときは尾をたて、すりつく。玉はねずみをとるとほめられるものだから、鼻を高くしていばる。玉はまことにおもしろい。

地震と火事

神田區 小川尋常小學校

第四學年男

藤本 實

大正十二年九月一日。僕が學校から歸つてきて、二階で友だちとあそんでゐると、ぐら／＼みし／＼がた／＼といふ大きな音がする、何かと思ふと大地震である。

かべがおちるやらかはらがとぶやらあぶなくてとても生きたきはしなかつた。見る見るうちに近所の人も表通りにとびだしてふる／＼ふるへてゐた。其の内に四方八方から火が起つてだん／＼僕の家の方へ近くなつて來たので僕と母さんと一つ橋へにげた。すると文部省へ火が付いたので火の粉が雨のやうにばら／＼と頭の上へふつてきた、とても暑くて立つてゐられなくなつた。

どうしやうかと思つてゐると、宮内省の門を明けていれてくれたので實にうれしかつた。中へはいつておちついたが、午後十二時頃だつた。翌日から親類の家へ行つて世話になつた。

震災の話

神田區 小川尋常小學校

第四學年女

細淵 錦子

『あれ！ ふみ子さんですか、ずいぶんまあしばらくですわね、皆さんぶじでしたか。』

『いゝえおちいさんが一人ひふくしやうでなくなりました。』

『おや、それはをしい事ですねー、赤ちゃん御じやうぶですか。』

『え、おかげ様にじやうぶです。』

『そうですか、ようございますねー。』

『ふみ子さんはどこへおにげになりましたか。』

『上野へにげました。上野へにげる途中でおちいさんと私どもとは、はなればなれになりました。そして上野に二晩とまつてそれからしんせきに行きました。二晩とまる内にたべものや水なぞにこまりました。水なぞはおいけの水をのんだくらゐです。』

『そうでしやうねー。』私どもは文ぶしやうの前へにげて、夜の七時頃文ぶしやうの裏の方へ火がつかましたので、人々は大ききわぎをしました。すると宮城の大門をあけて『はいれ』と言つてくれましたから、私たちは思はずそこへはいりました。

私も食物がないのでこまりました。私どもは三晩とまりました。『本とうにゆめのやうに思ひますねー。』

九月一日の地震と火事

神田區 佐久間尋常小學校

第四學年男

菅野 迪夫 (十二歳)

僕は、九月一日に學校から歸つて、御飯を食べて本を讀んでゐると急に強震がおこつた。人々は驚いて往來へ出た。僕もその中の一人であつた。すると消防所の方で自動車ポンプの音が聞こえた。まもなく一人の人がつつみをしよつてにげて來ました。その人の話によると火事がおきたと言ふ事である。すると今度は万世橋驛のプラットホームはもろくも倒れた。又今度はニコライ會堂の裏手にあたつて黒い煙が見えた。僕は生きてゐる心持はなかつた。するとふーとおそろしい風がふいて來た、僕たちは思はず地にうつぶしてしまつた。まもなく火の手がまはつて來ましたので僕はお母さんと、重子と、よしと四人で、上野の山へにげた。やうやう山へたどりついたら、もう山は人でもつてうづまつてゐる。それでもやうやく博物館の前へ行つた。そこへおとなりの山もさんも來たので、かややふろしきで家をこしらへました。しばらくそこにゐましたが、きかだんに火がついたと言ふのでそこにゐられなくなつたのでこの上は逃るだけ逃

それは去年の九月一日の大震災の事である。まあ、こわかつた事よ、色々な事を思ふにつけては去年はまつ先にこわい年どうかび出る。

東京や其の附近の家々は焼け、地面は割れ、おまけに人は何千人とも數へきれない程其姿がかぎりない遠い、わからぬ所に行つてしまつた。あゝ私はあの時に其災害をのがれられたと思ふとまるで夢のやうに思ふ。

私はおばあさんの手をひいて私の家より二哩も遠い谷中と言ふ所から尙一哩もはなれた瀧の川と言ふ所まで一しやうけんめいでにげた時の様子はどんなであつたらう、くるつてゐる馬のおなかの下をくつたり火におわれたりしてやつとにげて來た時の心持はどんなであつたらう。

その間にだん／＼と西の方が赤色や黄色にしずんで來た。

その夜はおとうさんの知つてゐる瀧の川の親類で明した。

こゝは焼けなかつたのでおざしきへ上るとうれしいやら又地震でもこないかなど言ふ心配もあつたけれども何しろ前のつかれでぐつすり眠てしまつた。

目をさまして見ると朝なのでいそいで起きて井戸の水で顔を洗つた。その水はつめたくて氣持がよかつた。

外へ出て見るともう前日の家々のもゆる火の氣はなかつたがこんどは悪い人が火つけをすると言ふので前よりも一そうこわくなつてしまつた。

こんな事を考へてゐると體中がぞつと水でもかけられたやうになつてしまふ。

そのうちにだん／＼と眠くなつてしまつた十二時を打つ時計の音は楽しい夢の内にかすかに聞えた。

震災後の生活

神田區 西小川尋常小學校

第四學年男

藤田 一雄

諸君去る九月一日に思ひがけない大地震が來て、東京市をば大方こはした。其れでも氣がすまないと思へ氣がすむまで焼いたが三日間でようやく止まつたらしい。又今度あつたら東京市をせんたい焼くかもわからない。又〇〇人さわぎでうつかりねんねが出来なかつた。その後バラックへ入つて生活をして居るが、焼けない所へ行つて見るとうらやましい程である。うらんでもうらみきれない程であるけれども仕方がないからあきらめる。何しろ品物が足りないから仕事に自由が出来ない。

僕等はちよつとでもじようきぼんの音をきくとむねがごき／＼する。さいはい近所に火事がないからよいが、若し火事があつたら二度焼けるのである。火事はほんたうにこわいものである。

地震後の私共

神田區 西小川尋常小學校

第四學年女

中島 幸子

あゝあはれこの帝都。

私がちやうごこの一月西小川小學校のバラックの學校へ初めて来たときみすぼらしいムシロの上に座して勉強をしてゐる昔の友達の有様を見て、『あゝ私も此の仲間なのか』と思ふといつの間にもやら目には涙がにじんで居る。この時ハットむねに浮んだことは自分の家のものはすべて目に見えない灰となつてしまつたことであつた。學校はバラックだし自分の家近所の家はみすぼらしいバラックの家とかはつて居る。

やがて春が来るにつけて思ひ出す。去年は花見、潮干狩と蝶の如くうかれ遊びまはつたけれども今年の春はそろ／＼櫻のつぼみもひらきかけて美しい聲で小鳥のうたい

くるふ頃になつても、私共はたゞ両親のため家のためと一心にはたらき勉強もして家の復興を待たなければならぬ。其の上私共の大切な學校道具もそまつにしない様にと、けんやくにけんやくを重ねて學ばなければならぬと思ふ。そうして私共はこの帝都が一日も早く復興することをいのるのである。

大正十二年九月一日

神田區 今川尋常小學校

第四學年男

上谷 松夫

大正十二年九月一日午前十一時五十八分俄かに家がゆらく／＼と動き出しました。僕は丁度學校から歸つて来たばかりなので、母上と妹の貞子とお話をして居りました。急に『地震だ！』と大きな聲が聞へました。その時僕は何の考へもなく無中で母につかまりました。五分も十分も二階でゆられてゐるうちに少ししずつたので、母と妹とだけ合つてやつと下へ下りました。そしてあたりを見れば瓦や、がらすがたくさん落ちて居ました。そこへおとなりのお巡りさんがいらつしやつて『表へ出ればあぶない家に居た方が安全だ。』と言ひましたからしばらく皆で布團をかむつて居りました。約一時

間餘りも居るうちにすぐそばから『火事だ』と言ふ大きな聲が又しました。それでびつくりして飛出て見ますと二三間先から火が出てをるので僕も妹もしやつ一枚着たばかりで逃げました。外へ出て見れば風が吹く方々から火が上る。どちらへ逃げればよいかと考へて居ますと、お巡りさんが來て『どちらへでも火のない方を見て安全な公園へ逃げなさい。』と教へて下さいました。それでこみ合ふ中を苦しい思ひをして五時頃丸の内に着きました。此の間四時間餘りもかかつたのでお腹がすいてへど／＼になりましたが食するものもなし、それかと言ふて飲む物も無いので、それが何よりつらいと思ひました。其の夜は一晚中眠る事も出來ず松の木に人の名を呼ぶ聲や人家がド／＼とたふれるものすごい音を聞いては美しかつた都も今度こそは皆焼けてしまふのかと思ひました。どうしても焼ると思はれない警視廳や、日本銀行や並に三越も何一つ残らず焼けてしまひました。僕は此の時はじめて地震や火事と云ふ物はこはいものだと思ひました。それから二三日丸の内にひなんして居りましたが食する物もないのでこまつてゐる所に〇〇人さはぎなのでとてもこはくて居られなかったのでこみ合ふ汽車に乗つて田舎へ歸りました。僕は焼跡も見ずに田舎へ行きましたので大したものも見ませんでした。丸の内にひなんして居る時に、丸の内に出來ました赤十字病院の中に

おとなりのおばさんが赤ちやんを産みましたので、僕とお母さんど見舞に行きましたら、いろ／＼なけが人が居てお医者様やかんごさん方が忙しそうに親切に世話して居ました。僕はそれを見て家も着物もみな焼いてしまひました。がけがなく無事でひなんしたのがうれしいと思ひました。

復興の神田區

神田區 今川尋常小學校

第四學年女 梅 田 タ ケ

今までのおそろしさをわすれたやうにあらたにできた土の上に家をたてる大工のつちうつひびきがトン／＼ととたんやねの音にあはせてふしおもしろさうにひびきわたる。その音がまるで復興しなさい／＼といつてはげましてゐるやうにきこへる。私たちの神田區もどん／＼復興して行く。私は九月一日の大震災、あゝおそろしいその一日を思ひうかべるけれどもそのたびごとにそんなことを考へてはいけな、今から復興してよい家をたて、よい日本にするのであるから決してそんなことを何時までも思てゐてはならない。私もいつしやうけんめいに元氣を出しけんやくをして前より

りつばな大東京、大神田にしてえらい日本人になりたいと思ふ。

震災の時のこと

神田區 神龍尋常小學校

第四學年男

高橋 正男 (十二歳)

なんじゆう年この方なかつた大地震が去年の九月一日にあつた、丁度お晝でした。僕が御飯をたべてゐる時でした。地震はだん／＼ひどくなりしまいに汽車に乗つてゐるやうでした、長い間ゆれてゐました。やむと火事がおこりました。僕の机には火の粉が飛んできます火は増々勢よく家の方へふつかけてますので荷物をかたづけました。僕はかばんをかけて神様をもつてお母さんと逃げました。お父さんのつとめてゐる新富町のおみせへまひりましたら、そこも火になつて築地海軍省へ逃げました。二時間ほどひなんしておりますと、だん／＼烈しく火の粉が飛んできてあぶなくなりましてので、ざいごう軍人が水交社へ逃げなければいけないといひましたから水交社へまひりますと、いけないといふので濱離宮までまひりました。又そこでも満員だから芝離宮へ逃げました。芝ふの中におりますと風がだん／＼烈しくなつてきて、火の粉が着

物に落ちてくるのでそばにあつた木の枝を折つてそれで火の粉をはらつておりました。僕が僕は焼け死ぬかと思ひましたので悲しくなりました。お父さんとは別れてしまひ、お母さんは病氣なのでなほ悲しくなりました。その中に風もかわり夜もあけましたようやく安心しましたらそばにゐた方が、ここにゐますとつなみがくるから早くお逃げなさいと言つたので火のついてゐる門をくぐつて芝増上寺の山門の所まで逃げて行つて三時間ほどたちますと、その前をお父さんが通りましたので僕はうれしくて泣きつきました。

儉約

神田區 神龍尋常小學校

第四學年女

垣内 アイ子

此の間姉さんと一緒に勉強をした時、松下禪尼の話を聞きました。それから私は儉約がくせになつてちよつこの事でも儉約する様になりました。此の間弟が大きなポール紙を細かく切つてゐるのを見ました。その時私が弟にそんな事をするこ又大地震がきますよと言ふと弟はすぐにやめてしまひました砂がお砂とうだと言つて遊ぶ時お客様が『五圓下さい』と言つても儉約しなければならぬから、そんなにたくさんはい

らないでせうと言つて少ししかやりません。焼けない前は世間では一松摸様の着物等はやつて人々がおしやれをして居ましたが、今でわ着物等は何でもかまわないうで復興々々と言つて皆節約して居ます。

焼 け た 後

神田區 芳林尋常小學校

第四學年男

大 越

孝

私は今までつるみの家にやくかひになつてゐたが、十二月の廿五日ごろにバラツクが出来上つたのでこつちの方にかたづいたのである。来て見ればまだふすまも何も出来てゐない。すきとほしだからたまらない、風がびゅうくと吹いてすいぶん寒い夜になつたのでねてしまつた。

よく朝起きて、四方を見ると、僕の家ピアノが鐵だけのこつてゐる、おるがんのすがたはかげも形もない。所どころにお父さんが去年桑の木だのひの木だのを買つて居いたのが焼け残つてゐる。

家には荷物がたくさんおいてある。八でうのへやも、荷物のために小さいように見え

る。一月一日の朝僕が學校に來て見ると、せんと、まるきりちがうので何が何やらさつぱりわからないで、門のそばにゐると松谷さんが來ていろくの所を案内してくれた。學校から歸つてたこをあげて遊んでゐた。

三日からだんだん日がたつて八日になつたので學校で勉強することになつた。

學校も今まではまるでちがふ。みかんばこやビールばこを机としてゐた。それが今では机がちゃんと出來た。近所には家が出來た。

これから方々にもつとく家ができて今にもとよりすつとよい東京になるだらう。

かなしかつたりうれしかつたり

神田區 芳林尋常小學校

第四學年女

新 井 一 枝

上野に三日間飲まず食わずで兄弟五人で、何も持たずひなんしました。三日のあけがたごろ今年五つになる妹がおなかすいたくとないた時のかなしさはありませんでした。その中に知つてゐる人が四五人で、おむすびと生卵と水をもつてさがしにきてく

ださつたのです。そして、てんでにべつべつの家にやつかいになりました。私は姉さんや、兄さんや、妹や、弟がどうしてゐるかと思ふとかなしくてたまりませんでした。それから七日ごろにお母さんの所がわかりましたので、いそいでお母さんの所へいきました。お母さんは、地震の前の夜おそくおさんをしました。

あくる日のお晝ごろ、おさんばあさんがきておゆをつかつている時あの大地震でした。あかんぼはあまりむりをしたので、九月二十一日に死にました。私はせつかくだいじにしてゐたのに、死んでしまつたのだと思ふとかなしくてたまりませんでした。

それから七日の夕方ごろお父さんが歸つて來ました。バラツクをつくる間、私はすうもの方にゐましたが、學校が十月十日からはじまるといふので、すうもから二三日電車でかよひましたけれどもすぐきもちがわるくなつて、とても電車ではかよはれないのであさ早くからあるいていつたこともあります。

學校へいつて、お友達とあつた時のうれしさはありませんでした。バラツクが出來たのでいそいで神田へかへつても、元の商賣はとも出來ないから少しの間は、おくわしを賣つてゐました。いろ／＼とお友達にわらはれましたけれどもがまんして賣つてゐました。そのおかねでようふくを買ひました。お母さんもだんだんとよくなつていくの

で私はうれしくてたまりません。

震災の時のお話

日本橋區 常盤尋常小學校

第四學年男

中 村 喜

一

僕が麻布の叔母の家に避難してゐた時に、よその叔父さんからきいたお話です。九月一日の火災の時に、本所の或人が被服廠に逃げたさうです。そしてその家は父母と男の子二人でした。被服廠に逃げたところが火がきたので、親子はつひにはなればなれになつてしまひ父母はそこをやうやくにびて、ある川の中に飛び込んで、たすかつたさうです。あとにのこつた二人の子供はにげばがないのでこまつていたのです。その中に火はだんだん強くなつて來ます。その時弟が言ふには、兄さん私は死んでもようございますから兄さんは早くここをでて父母の行方をさがしてください、と言ふと、兄はぼく一人逃げておまへを見すてるわけにはいかない。と言つて、弟をおぶつてにげやうとする。と煙のために二人はどうとうそこにたふれてしまひました。父母はあとでそこへ來て三万二千人の中から子供の骨をひろつて泣いて兄弟のお墓をたてたと言ふことで

震災後の町

日本橋區 常盤尋常小學校

第四學年女

寺島智恵子

日本橋通りと云へば誰も知らない人はないでせう。きれいな大きな建物が軒を並べてゐました。日本銀行や三越や白木屋を始め、本屋も食物やもたくさんありましたから、いつも大そうなにぎやかさでした。

日本橋の橋の上に目を丸くして立つてゐる田舎の人も度々見ました。大きな自動車や横町からとび出す自轉車が絶まなく續き、電車の行來がはげしくてこはいやうでした。柳屋の前の十文字の角にたつてゐるおまはりさんが汗出して、笛を吹いたり手を上げたりしてゐたのです。けれどもあの恐しい考出しても、身がぞつとする程の大地震火災の爲に一時は全く見るかげもない淋しい焼野原になりました。夜になると、けん兵隊の番兵さんがたゞ一人ピカ／＼光る劔附鐵砲をさしむけて、目を四角にして見廻るやうになりました。

あの時、私達の近所の人々は皆荷物を橋の上に運んだのでそれが焼ける時、さすがの石橋も所々はげが出来て、みかげ石のかけらが散つてゐます。すぐ焼跡へ行つた人に聞きましたら川の中に幾百人も死んでゐたし、舟もこげてゐたそうです。橋の上に立つと遠い／＼所までよく見へたと云ふ話でした。

日本銀行も三井銀行も焼のこりのれんががごろ／＼して、す／＼けた窓がきたならしく見えます。

お友達の家も學校も焼け、震災できたない町になつたので、見物人も來なくなりました。私は學校の行歸りに、三越の裏の方を見ると目がうるんで來ます。それでもだんだん日が立つて大分にぎやかになりました。十軒店のおひな様屋も少しばかりかざられました。

近所はちらばつたれんがもかたづけられてつちのひゞきが毎日聞えます。だん／＼新しい家が立ちならんでゐます。ペンキぬりの美しいお店もふえます。

名物の魚がしも築地へこしたので、今は大てい商賣をかへてゐます。朝のいそがしい様子もなく勢のよいかけ聲も聞かれません。

あゝ九月一日のおそろしい事は死んでも忘れません。私は復興の心持を持つて、でこぼ

この町を歩いてゐます。

大地震

日本橋區 阪本尋常小學校

第四學年男

椿

太郎

となりの友達の家へ遊びに行つてた時、急に家がぐら／＼と動き出したので、僕は地震だと思つて、すぐ家へ歸らうとしたが、ひどくゆれるので歩けなかつた。そばさんのそばへ行つて、友達と僕と三人で、くつ付いてゐた。柱は今にもたふれさうになり、窓の金棒もあめのやうにまがつた。ふすまや障子もはづれた。臺所の方でがら／＼と、せと物がおつこつて破れる音がした。

やがて地震がやむと僕はすぐに家へ歸つた。お母さんは金庫のそばにいらしたが、お兄さんが、

『家の中に居てはあぶない。』といつたので、皆んなで外に出た。さうして電車通へ行つた。千代田橋の所へ來ると人が大勢居て深川が燃えてゐるといふうはさがあつた。又三越の方に黒い煙が見えた。時間がたつにしたがつて火の勢は盛になつた。夕方には

空はまつかになつてしまつた。そして風もますますはげしくなつて來た。火のこは空を鳥のやうに飛んで來る。

『これはもうたまらない。』といつて、持てるだけの荷物を持つて逃げた。

吳服橋のそばまで來ると人や車でいつぱいで前へも後へも動けなかつた。やう／＼と通りぬけて、おほりのそばまで行つた。そしてやつと安心してその夜はそこで暮らした。

大地震と大火事

日本橋區 阪本尋常小學校

第四學年女

杉本とみ子

九月一日私は學校から歸ると正江さんのおうちへ遊びに行きました。他のお友達もいらつして、三四人でおままごとをしてをりますと、地震がゆれて來ましたので私達はすぐ電車通へ出ました。その中に兄さんが迎へに來て下さいました。

それから私は妹とお母さんと四人で、日の暮れるまで阪本公園に逃げて居ました。するとだん／＼火事は近づいて來ました。お母さんは、

『家へ行つて荷物を出して来るから待つていつらしやい。』かういつてお家の方へいらつしやいました。私は妹をおぶい、兄さんは弟をおぶつて四人で待つて居ました。そこへお母さんは、いろんな物を持つて歸つてまゐりました。『もう逃げるんだからたくさん御飯をおあがんなさい。』お母さんが申しましたけど、どうしてもいただく氣になれませんでした。

お家へ行くとき、大きな火のこがどん／＼と飛んで来て、あぶなくて表へ出られないほごでした、お父さんは、

『どこがいいだらう。築地の明石町へ逃げよう。』とおつしやいました。するとその中に風がかはつたので、どこへ行かうかと思つてゐると、

『もう兜町へ火がつかましたから早くお逃げなさい。』

おまはりさんがかう叫びながら自轉車に乗つて廻つて来ました。お父さんは、

『丸の内より他には逃げる所がない。』とおつしやつて先に立ちました。私達はみんなでかけ出して逃げました。かち橋を渡る時右を見ても左を見ても火がぼう／＼と燃えてゐるのがよく見えました。

大 震 火 災

日本橋區 久松尋常小學校

第四學年男

林

精

一 (十一歳)

大正十二年九月一日午前十一時五十八分四十二秒、思へばほんとうに恐しい日である。僕は第二學期の一日目としてたのしく學校へ行き無事に家へ歸へつて来て、本を讀むのであると、グラ／＼といきなりしんどうがはじまつた。いつもとはちがつてだん／＼ひごくそうしてひごくゆれて来たので家中皆一つになつてゐた。この時はお店が土間にしてあつたので奥にいるよりお店へ行つたほうが安全だといふのですつかり火を消して一同そのまま、お店へ行つておむすびをたべた。僕はたゞぼんやり時々餘震があるたびにびく／＼してゐた。その内に本石町から出火した。それでも風は神田の方へ行くので家では火事は大丈夫だと言ふので餘震があるのを皆こはがつてゐた。それから濱町の叔母様の所へ使出して皆さんをおつれして来たたゞ皆わく／＼してほかににも考へなかつた。四時頃であらう急に風がかはつてこちらの方へ火の粉がとんで来るようになったので、これではとてもだめだと思ひ女と子供はにげる事にした、一石橋まで行

くどたいへんなこんざつで、なか／＼丸の内の方へは行けなかつた。それでも僕たちはなにももつてゐなかつたので、車の間を通つてやう／＼郵船ビルデングの前まで行つた。それでもあまり寒いのでまた歩いて和田倉門内て野宿することにした、僕はねむくてしかたがないのですぐになつた。翌朝四時頃に起きて見ると太陽が眞赤になつてゐた。しばらくたつてお父さんとおちさんが本郷曙町のおちさんのお家を見にいらした。僕はその時お店の人と遊んでゐたしばらくたつてお父さんだけ歸つていらつしやつてやけなとおつしやつたのでしたくをして和田倉門を出た、叔母様はびようきの爲にどうしてもおあるけになれないので僕とお店の人とこぞう二人でさきへ行つて車をたのむことにした。やうやく車があつたのでこぞうを一人そこへおこしておいて三人でさきへあるいていつた、やうやく曙町のおちさんのお家へついたら、足をふいてあがつておむすびをいたゞいたその時は實においしかつた間もなく叔母様が車でいらした。その時の叔母様のお顔といつたらなんともいへなかつた。すこしたつてお母様たちがいらした。お母様のお顔も叔母様と同であつた。その晩は池のはたが火事であつた、僕はお父様ににげる時には、おしへてくださいと言つてねてしまつた明日起きて見ると皆さんはもう起きていらしたので僕は飛起きた。すこしたつてお店の人

たちがおもてへごぎを引いてすはつてゐると、巡査が来て〇〇がつけ火をしますから用心を下さい、と言つたので皆棒を持つて用心をしてゐた。その晩からはお店の人たちが二人づつばんをすることになつた。

震災に就て

日本橋區 久松尋常小學校

第四學年女

田 中 光 江 (十一歳)

淺草橋までようやく出て來た私たちは『ほつ』とためいきをついた。火はおかまいなしに四方八方に、もえひろがりおそろしくも、ものすごいじやのしたは大きな建物を何の苦もなくべろ／＼と、なめてゐる。何百人とも數が知れない人の顔は皆蒼白く目は血ばしつてゐる。そして其の人たちが我も／＼とさきをあらそつて、何所もなくにげて行くあり様は、なほ人たちにおそろしさをあたへるばかりである。淺草橋はもう荷車、馬力、人間なごでぎつちり、とても私たちには、わたれさうもない。と言つてわたらなければほかに行く道はない。思案に暮て、居れば火には追ひつめられ、人たちはもまれ、つき飛ばされともぢつとして居られない。『思ひ切つてわたつてしま

おふ。私たちこう言つて、人ごみの中をおしわけ荷車の下をこぐつてやうやく橋をこえた。『ほつ』と二度目にためいきをついた時には、もうみんなどはなれんに、なつて、私とお母様と二人きりになつて居た。それから何時間たつたであらう。私とお母様はしらぬ間に上野の山下に来て居た。浅草橋から山下まで来る間は、ほんとうに無が無中だつたので、はつきり書あらはす事は出来無い。其の時火はなほ一そくいきおひをまして、町から町へ區から區へともへひろがつてゐた。

未来の大東京

日本橋區 城東尋常小學校

第四學年男

齊藤清三郎

私たちの住んで居る東京は去年の地震や火事でめちや／＼になつてしまひました。私はあの後田舎の學校へ通つてゐましたが京橋に家が建つたのでもどつてきました。今度の東京は前の東京より、もつとりつぱにしたいと思ひます。第一道路を廣く、眞すぐにして、たひらにし、大きな公園を澤山造り、何所の家も鐵筋コンクリートを使

つて、丈夫な家ばかりにしたひと思ひます。それから私たちの學校も、もつとりつぱにして、運動場を廣く取り、運動の機械を澤山にし、内運動場も大きく造つて、面白く、遊んだりして、勉強したいと思ひます。大東京を造るには先づ交通を良くして地下鐵道をひき郵便は飛行機ではこぶやうにして、川は大きく深くして、汽船が自由に通れるやうにし、道路の下はごかんをうづめてごぶの中のきたない色々な物をみんな流して、さつぱりとし、道路の上には、アスハルトで固くして、雨の降る日も困らぬやうにし、ポプラの木を植へてけしきをよくし、東京灣に港を造り、そこへ汽船や軍艦などが通う様になり、高架鐵道は高くして、其の下を二階建の乗合自動車がかゞれるやうにし、上野公園や浅草公園をきれいにし、すみだ川にかゝつてゐる橋は幅を廣くしてもつとりつぱにしたい。

それから震災で澤山の人が死にました、ひふくしようあとには、りつぱなお寺を建て東京にゐた人たちは、皆お参りしたいと思ひます。

大震災

日本橋區 城東尋常小學校

第四學年女

中井 マサ子

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、關東地方に、未曾有の大震災が起りました。私はお家の人たちと共に、長い夏休みを大磯にすごしました。

そして此の日は朝から學校へ行つて、なつかしい先生やお友だちと共に、楽しい一々半日をすごしてお家へ歸り、晝ごはんの、おせんに向つて箸を取つたばかりでありました。

ちやうど其の時世界の終かと思はれるばかりの大地震が、ごしんと來たのでありました。つゞいて起つた火災は、一夜の中に大東京をしよう土としてしまひました、私はお家の人達と一しよに、さのみ着のまゝで丸の内へ多せいの人にまじつて命からがらにげて行きました。さうして幸ひ命だけは助りましたが、家も着物も道具もみんな焼けてしまひました。

何と云ふ半日の樂しさ、半日の恐ろしさでありましたでせう。私は天さいほどおそろしいものはないと思ひました。

此の震災では父母をうしなひ、兄弟に別れた方がたくさんあるさうですが、まことに、お氣の毒な事です、体だけでも助かつた私たちは、何よりの幸ひだと思ひます。

こしやう土となつた東京は、日に、バラックが建つてふつこうしてゐます。もとの東京より以上のもつとく立ばな東京になるのも、さう遠い事ではなからうと思ひます。それにつけても、私達はまだ小さいものですから、何一つためになる事が出來ないのは残念です、たゞ一心に勉強しようと思ひます。

黒

イ

煙

日本橋區 有馬尋常小學校

第四學年男

小林 孝次郎 (十二歳)

僕ノ家ハ地震トトモニツブレタ。ロヂノ方ニ商品物ガハミダシテキル、ドコノ家モ瓦ハオチル、カベハクズレル、コノ世ノサマトハ見エナイ。

トナリノオバサンガ瓦ニオサレテ顔ノ色ハマツサラ、オ醫者ノ所ヘ連レテ行ツタラ最早死ンデキタソウデス。オ日様ハ西ニハイツテシマツタ四方ヲ見テモ煙バカリ、逃ゲル人ハアチラニ行ツタリコチラニ行ツタリ迷ツテキル。

僕ハオカアサント妹トデ牛肉屋ノオヂサンノ家ニ行キマシタ、ソレカラニイサンモキタスルト僕ノ家ノ番頭ガ『モウダメデス家ハ焼ケマス』トアワタバシク走ツテ來タ。ソ

レカラ僕ト番頭トデ丸ノ内ニユクトイツテヨロイ橋マデクルトモウ橋ノ上ハ荷物デ通
ルコトサエデキナイ、其ノ上火ハサシセマツテキタノデ僕ノ命ハナイカト思フホド。
ソレカラハナニガナニダカワカラナカツタ。今思セダシテモモノスゴイ。

ほろびた都へ

日本橋區 有馬尋常小學校

第四學年女

木村登志子 (十二歳)

大震大火のために私の家は焼はらわれてしまひました。

九月一日は房州北條に居りましたが『東京ハ火ノ海』と人々が口々にさわぐのでお父
さんはどうかしら、兄さんはどうかしらとお母さんと涙ながらに心配してをりました。
六日私がおふろに入つて居た時お父さんが雇人をつれて私達をたづねて来て下さつた
のでゆめかどばかり喜こんで七日の朝東京へ来る事にきめました。汽船は汽てきを鳴
らしてれいがん島へと向つて行きます。私は今か／＼と待つて居る中にどう／＼れい
がん島につきました。見ると東京は焼野原にかわり何もそのものはありません。そ
こらあたりは死人でうづもれてゐます。こはいながらも上つてそこ、ここ芝のおぢ

いさんの所へたどり行きました。家は焼かれずにとまがつたばかりでしたので一時
の避難所とさめました。

近所の朝

日本橋區 千代田尋常小學校

第四學年男

小林邦司

ちん／＼と時計の音に目がさめた。はね起きて見るごもう六時である、顔を洗ひに
外へ出た。外はまだうす暗くて牛乳配達がいせい良く車を引いて行くのや、新聞屋が
方々の家々へ勢良く配つて行くのが目についた。二三人の男が四つ角の方へ行つた多
分大工でも有るだらう。

七時頃になると人通りも多くなりあちらからこちらからも大工さんがやつて来てた
き火を始める。それを見ると震災の事を思ひ出さずには居られない。もうあれから半
年になるのにまだ何分一といふ位しか家がないといふ事は人がそれだけないと言ふ
のだもの。随分せはしくて景氣が良い様だけれどもその中に何んとも言はれないあは
れな所がある。僕等は子供でさへこれからさきどうなるだらうと考へるのだから、大

人の人が心配らしい様をしたたり、あせつたりするのも無理ではないと思ふ。

バラツク

日本橋區 千代田尋常小學校

第四學年女

古澤久美子

思ひ出してもぞつとする。あの九月の大地震で今まで大きく店をあけていた家も、今度は小さい家を建て、はいつてゐる。近所の家を見ると食料品のような物をうつてゐる。私の右となりは今までは大きなビルディングだったが今度は今までのとくらべると豚小屋のやうに小さい。左よりは銀行でせんは大きなたてものであつたが今は見る事も出来ない焼土となつてしまつた。にぎやかではあるけれどもそれはみんな大地震のあとかたづけのためである。あの車にもれんぐわが山のやうに積んである。あの車にも焼土が、

今大工さんがいそがしさうに走つて行つた。あんなに大勢で働いてゐてもそれはみんなバラツクしかた、ないんだからなさけなくなつてしまふ。

こんなものを見てゐると私はこゝが東京かしらと思ふ。あのなつかしい東京がどこか

よそにあるのではないかとゆめかほんとうかわからなくなつてしまふ。

震災について

日本橋區 十思尋常小學校

第四學年男

鈴木芳之助 (十二歳)

時は大正十二年九月一日午前十一時五十八分大音響と共に方々の家が動きたした。人々の泣きさけぶこゑ天地にひびくかと思つたまもなく『火事々々』といふおそろしいこゑがごころからとなく聞えて來た。もうその時にはごこの家でも荷物を車につんでにげてゐた。

二日の日にはもう軍たいがいろ／＼の食料品をくれた。三日の日には家の焼あとへいつた、おどろいたのは見わたすかぎり焼原である。僕はこの東京市がどうなる事だろうと思つてゐたが、それから三四ヶ月にはバラツクでこの東京市はうづまつた。もう焼けた物はとりかへしがつかないから、これから我々少年たちは大いにべんきょうしてこの東京市を元よりよい東京市にしやうではありませんか。

九月一日の大震災

日本橋區

日本橋區 十思尋常小學校

第四學年女

石川 やす (十一歳)

大正十二年九月一日は私の忘れられない日であります。私はあの震災の時臺所で洗ひ物をしてゐましたが、急にぐらぐらと音がしたので奥へかけて行きました。その内にくらは落ち障子はまがつてしまひました。地震がやんでからおくらへ大切な物を出しに行つてゐるとすぐ後通の家から火事が出ました。そして風呂敷包を持つた人々が大勢かけて行きます。おどろいてふだんいる物又大切な物等を持つて皆で堀江町の親類へ行きましたが、こゝもあぶないといふので銀座へにげましたが又焼けさうなので丸の内へ行きました。一晚丸の内野宿しました。夜になるとおなかつすいてたまりませんでした。あくる朝青山のお寺まで歩いて行きました。途中で度々水を飲みました、やうくお寺へ着きました。やつと安心してごはんを食べました。晩は〇〇さわきで大そうこはうございました。あの時は東京もどうなる事だと思ひました。その時のこはかつた事は一生頭からはなれません。あゝこはかつた九月一日

九月一日の大地震

日本橋區 東華尋常小學校

第四學年男

谷 澤

琴 (十二歳)

大正十二年九月一日、その日は朝から、いやな天気でしたが、夏休がすんで初めての日、よろこび勇んで、學校で、友供と話をして居た。式をすませて、家にかへり、やすむまもなく、丁度午前十一時五十八分と云ふときであつた。にはかにゆれだし、かはらは落ちる、家はつぶれる、人はさわぐ、ほんどうにすこかつた。その内、本石町が焼け、箱崎からも火が出た。だんくひろがり、夕方には、家の方がやけました。淺草橋の方へにげると、人や荷物で一ぱい、やうやくおしわけてにげ、上野につきました。ここも車や荷物で一ぱい、身動きも出来ないほどの、こんざつでした。あたりを見るど、煙と火でものをすこい。時々ゆれかへしが來るので、生きた氣もちがありませんでした。

二日二晩は、まるで火の海で、おもひ出してもぞつとする。

わづかの間に、日本一の大都會は、家はやけ、おくらの人は死に、大切な物は、かつかぎりもなく、消失して、赤黒い焼灰の山とかはつた。これは東京市ばかりでなく、日本の國の大そんがいである。また世界の大きそんがいである。これも日本の國のため

物が木造であるからであつて、地震にたへることができても、火事にたへることができないからである。火事や地震にたへることができない家を、たてることが、心がけなければなりません。さうしないと、再びあの當時のやうな、おそろしい目にあふでせう。

九月一日の思ひ出

日本橋區 東華尋常小學校

第四學年女

永守ワイ子 (十一歳)

九月一日、これは私たちの、一生忘れられない日である。

あの九月一日。私たちの楽しい夏休もすみ、なつかしい先生やお友だちに會へる日であつた。私は、うれしさうに學校へ行つた。皆と休中の話をしたり、先生からもお話を聞き、喜んで家へ歸つた。間もなく、お晝頃になつたので、お母さんが、ごはんのしたくをしてゐた。するとあの大地震がたたくとゆれ出した。私は驚いて、外へ出やうとしたが、お父さんが外はあぶないからといつたので、外へは出なかつた。けれども、地震はますますひどくなる、あまりの驚きに、私は顔色をかへて、お母さんに

だきついた。やうやく地震もやんだので、兄さんが外へ出て見たら、外は又火で眞赤。『あれ／＼火の手が四ヶ所八ヶ所。』といつてゐる間に、かぞへきれなくなつた程であつた。いよいよ家があぶなくなつてから、私はおばあさんと先へ逃げてしまつた。さあごへ逃げてよいか、それさへわからなくなつてしまつた。仕方なく、大勢の人の後へついて日本橋通へ出てしまつた。やつと安心して又も、つかれた足をひきずりながら、日比谷まで行つた。さうして一晩あかした。さて起きて見ると、まだ火は盛にもえてゐた。その中横濱のをぢさんが、私たちの名前をよんでゐたので、私も大きな聲で返事をした。

少したつて、おちさんやお父あんやお母さんが、私の居場所の所へ来てくれた。私は思はず聲をあげて泣いてしまつた。

今年の豆まき

日本橋區 濱町尋常小學校

第四學年男

藤谷彌太郎

僕のたのしくまつてゐた豆まきの日が來たので僕はうれしく思ひました。しかし今

年は大震災後なのでどうもえんりよしてか、さむしゅう御座います。僕はお父さんに今年はだれが豆をまくのですかと言ふと、お父さんはお店の人がまくのですと言つた。僕は方々へ行つて、まくのを見に行つて、かへつて来てから御はんを食べてお父さんまだですかと言ふと、八時までにまけばいゝと言つた。僕はまちどほしかつたチンチンと、八時をうつたので、僕はお店の人に早く早くとすゝめた、お店の人はではやりませう、と言つた。僕はうれしくてたまらなかつた。一番はちめはお店で福は内おには外と言ふと、内の赤ちやんははちめてではないのに、おどろいてゐます、そのつぎはあくでした。家の者は、お店の人のあとをぞろぞろついてゐきます、ので僕はよそうと思つたがうれしくてよせない。べん所の中までぞろぞろついていくお父さんはおくでにこにこわらつて居た。僕は豆を食べてから豆ぶつけをしてねた。朝起きて見ると豆がいつぱい外へこぼれてゐた、僕はもつたいないことをしたと思つた。

今年の豆まき

日本橋區 濱町尋常小學校

第四學年女

平井トシエ

今年は、去年とちがつて、節分も淋しさうでなんだか福が来たやうな気がしない。これも、去年の大震災大火災のためであると思ひます。しかし去年のやうな、不運な年を追はらつて、大正十三年にはあんな不幸のないやうに福をよんで今年こそ幸福の年をとりたいた、思ひますが鬼が入りこんで来てはなりませんから、豆をうんとまいて鬼を一匹も残らずに殺してしまつて、鬼の入れぬやうに、致しませう、四日の朝は日本晴れでいゝ年を迎へたやうで、ありましたやがて夜になるとお母さんはほうろくで大豆をいつてゐらつしやいました。夕飯がすんで七時頃になると、方々の家々から、大人や子供が『福は内。』『鬼は外』と大きな聲をはり上げて、元氣よく福を迎へて今年家ははんじようする様に又は年をとるために、お父さんは、四十三食べお母さんは三十七食べて、私が十二食べました。そうして面白く遊んで夜は八時頃にねました。私がねてゐますと目の前へ一匹の鬼が来て、私をさらつて行かうと思つて、私のむなぐらをどんとつき私はそのひようしに目をさますと夜中なので『まだ夜が明けないの』とお母さんに聞きますと『まだ夜中だからねておいで』とおつしやつて、又目をつぶつてねてしまひました。しかしこわくて眠ることが出来ませんでした。私は恐い夢を見たので何か悪い事があるかと思つて恐しくてなりません。この上ごうか何もなければよいと

思ひます。

大震災のため川の中で一夜を明す

日本橋區 箱崎尋常小學校

第四學年男

藤原

孝 (十二歳)

九月一日の正午頃、僕がお使から歸つてきて臺所の所へくると、がた／＼地震がよつて來ました。

僕は其の時そとへ出ないでいると姉さんが外へひつぱり出してくれました。その時お客さんはだしのまま表へにげました、しばらくの間は一人で立つて居ましたが、お客さんと一しよに戸の上へすわつてゐましたが皆の人々や姉さん達が船へ乗らないかといつたので船へ乗りました。そして箱崎橋に居りました。しばらくの間は方々の焼けるのを見て居りました。その内に僕達の居る方の川岸へ火がつかましたので向ふ川岸へいつてしまつてゐました。

あまりあついで水をかぶりました。僕達の乗つてゐる船はお念佛の船のやうに皆の人々は手をあはせて、

『なむみやうほうれんげーきよ』といつて拜んでゐました。

まはりは一面に火だらけでどこへも行けない、

その内に船に火がついたので、他の舟へごんごんにげましたが、しまいには川の中へはいつてしまひました。

そして深い所に細い一本の綱がありました。その綱はいかり綱でそれがつるさがつていたのでした。そしてその舟は焼けて、いまにも綱は焼けそうなのに僕と、姉さんと、久さんと、ちさ子さんと四人でぶるさがつていました。姉さんとちさ子さんの二人はやくおぢさんやおばさんの所へいつてこもをかぶつてゐましたから、あまりあつくはないだらふと思ひました。

それから僕はその綱をはなしてうはかだけ焼けた丸太に乗つて居ました。その内におばあさんが、きて久さんをつれていつてしまいました、その時僕もつれていつてくれるのかと思つたら僕はつれていつてくれなかつたので、

『よしそれなら僕一人だつていく』と一人言をいひながら足で物をおしてどう／＼姉さんの所へ行きました。

僕は、はだかになつたので姉さんの、きものをきて、姉さんはじばんとさるまた、

だけでした。

こもをかぶっている内に、目が見えなくなつたので、目のあく人にあんないしても
らいました。

そしてやつと陸へあがりまして、それからお母さんをさがしに行きましたが見つかり
ませんでした。

その中に中島屋の小ぞうさんがさがして来てくれました。

夜明頃やうやく火がしづまつて来たので家に歸つて見たら丸焼になつて金庫だけ残
つてゐました。

大震災大火災

日本橋區 箱崎尋常小學校

第四學年女

大熊 登喜 (十二歳)

九月一日十一時五十八分ごはんを食べやうとして、おせんをならべてゐますと、とつ
せんみし／＼とすさまじい音がして、家がゆれて来ました。私はびつくりしてお母
さん、弟たちと一しよにたんすへかじりつきました。かべはおちるし、たなからはいろ

／＼な物がおちてきました。その内ゆれがしづかになつた時おもての大通りへ出まし
た。大通には大勢の人がしたひに、あせをながしながら『こんな大地震は始めてだ
ほんとにこわい』などと、口々に言つていました。少したつと、向ふの方から黒い煙
が見えましたすると、誰か一人が『火事だつ』とさけぶと大勢の人が『火事だつ／＼』
と一時にさわぎ出しました。

私はお母さんと川向ふの大正公園へにげて行きました。

もう箱崎學校へ火がつきました。風向きがよかつたので横に横にとやけて行きました。
十分ぐらいたつと風向きがかわつて公園の方へふきつきました。私はお母さんと丸の
内へ行かうと思ひましたが火の手が四方八方へ廻はつて、にげる所がなくなつてしま
つたので、しかたなく風下／＼とにげて、ついにつきじの海軍参考館へにげていきま
した。

海軍参考館にいた人は、みな、なげいていました。火は一そう、つよくなつて、参考
館につきました。もうにげる所がないので、一間半もあるへいをとびこして、野原に出
ました。私は草かげへうつぶしになつて、いました。風は『こーつ／＼』と、ふきあ
れるし、火の粉は雨のやうにふりかけて来ました。子供のなき聲、女の人のさけび聲

など聞えます、こんな物すごい一夜をあかしました。
翌朝参考館を後にして、日比谷公園へ急ぎました。
日比谷公園で、わかれた、お父さんをさがしましたが見當りません、その内雨がふり
さうになつたので、電車の中にはいつて居りました。そこへ思ひがけなくお父さんが
たつねて来ました。その時、私は何もいへないほどうれしうございました。
そして今度は丸の内へひなんしました、翌日おむすびをいたゞいてきました。そのお
むすびをたべ終時のおいしさは、今だにわすれられません。四日目にさうかまである
いて行つて、かすかべから汽車にのつて。五日目にやうくさい玉のをちさんの家へ
行きました。

學校がこれまでになつた

京橋區 寶田尋常小學校

第四學年男 和田 安正

學校がこれまでになる間にはいろいろな事があつた。瓦の上に帳面を置いてかん／＼
と照りつけるお天どう様をうしろにして勉強した事もあつた。その内にテントが來た

のでみんなで立てる時、僕と門さんが中の柱を持つてゐると急にたほれさうになつ
たのでおどろいた事もあつた。

それから嵐の日、學校へ來てテントの中に入つたらだれもゐなかつた。すこしたつて
から鐘がなつた、すると間もなく今津先生がいらつしやつた。たつた二人だものだか
ら笑ひながら先生が「たつた二人だけ」とおつしやつた。それから少ししたつと二組の
生徒が一人來たが、それでもたつた三人なので休み時間などもさびしかつた。

十月になるとお友達がだん／＼ふえてにぎやかになつたが十一月になつてばらつくを
立るので四五日休みがあつた。今ではこんなに立派な學校が出來て大せい毎日勉強し
てゐるが學校がこれまでになる間にはずるぶるいろいろな事があつた。

この頃の町

京橋區 寶田尋常小學校

第四學年女 時谷 千代子

この頃は町の兩側に家がぎつしり立ち並んで立派になりましたが、去年の十月頃は
家も立ちませんのでまごから遠くの方まで見通して、どこからどこまでも一目に見え

ました。それですから夏のうちは日が照りつけ暑く、冬になると北風が吹き通して寒さが骨にまでしみました。十二月へ入ると急にどこでも大工さんが来て朝早くから風のひゆう／＼ふく寒い所で材木へこしかけてとんかん／＼と勇ましい音をたて、仕事をしてゐます。晩はおそくまで夜なべをしてゐましたからたちまちうちがぎつしり立ちました。そこでみんなお正月を迎へました。

この頃たつ家は大きい二階家です。そしてだんだん人もふへどこの町内でも夜廻りを始めたので夜も安心してねむられるやうになりました。

私 の 家

京橋區 靈巖島尋常小學校

第四學年男

安藤春太郎

私の家は長崎町一丁目六番地にあるのです。今でも『あゝ焼けなかつたら』と口へは出さないが元の宅がなつかしいように思はれます。

家は八疊と四疊と二間あります。家中の人は皆で七人です。外に職人が一人ゐます。にいさんと職人は大工ですから、朝早く仕事にいつて、私が目をさます時にはもうゐ

ません。お母さんは宅の仕事でいつもがしい、赤ん坊は朝早くからおきたがつて

なきますので、その度におこされてしまひます。今朝も赤ん坊に起されて目をこすり

／＼時計を見たら四時半であつたので、又そのまゝねてしまひました。

夜になるとおせんを出して、にいさんや職人のかへりをまつてゐます。歸つて來ると

色々な話をしながらごはんをたべます。

赤ん坊はさもいたづらしさうに皆を見てゐる。たべてしまふと私は赤ん坊をあそばし

てやります。

そうするとせなかではねてゐます。

あゝ、ありがたい

京橋區 靈巖島尋常小學校

第四學年 女

鈴木富美

昨年九月一日のあのおそろしい、いやな晩火に追はれて命がけで丸の内にひなんした時の苦しかったことを考へると、學校も内もバラツクだてでおそまつだけども、まるでごてんの様です

二日の朝まで飲まず食はずで、たゞまつかな火、おそろしい煙りをながめてびく／＼しながらやつと野宿をしたことを考へると、今は三度々々の御飯もいたゞけるし寒い思もしないで、せまくてきゆうくつになつても、ほんごにもつたいないやうです。學校もはじめはたゞやけた土の上であんべらをしいてべんきやうをしていたがそれからよくなつててんこの中で、べんきやうが出来るやうになつた、そして又なほよくなつてこんなやうな、バラツクへはいることが出来ました。

はじめ土の上にござをしいて、机もこしかけも、黒板もなくて勉強をしていたのに、今はみんな、そろつて楽しく勉強が出来るのは、何といふしやわせでせう。

私はあの苦しかつた時の事を忘れずに、一しやうけんめい勉強するつもりです。

節分

京橋區 鐵砲洲尋常小學校

第四學年男

加藤 一郎

二月四日は節分の日であります。去年の節分の日お父さんが『おい一郎豆を買つて来い』とおつしやつたので、豆屋へかけこんで小豆を買つて来たためおこられた。

一年はすぎて今年二月四日の節分に、思ひ出すとおかしくて／＼て人しれずふき出す程であつた。そして今度こそはまちがはない様にとよく考へて居たら、買つて来いとはおつしやいませんでしたので安心しました。

夕飯の時お母さんが御飯を食べながら僕の顔を見ておつしやいました。『去年の節分の日一郎は小豆を買つて来た事があつたなあ……』と、もうすぎさつた事ではあるが顔があつくなりしました。御飯がすんでお母さんがお湯へ行くのだと言はれたから、一つしよに行きました。一時間位たつて歸つて来たなら、もう豆をまいて眠つたのか豆が一つぶ二つぶころがつてゐました。

翌日僕は弟に『おい輝ぼう豆を誰がまいた』と言ふと『父ちゃんがまいてね「ふくは内おには外」と言つたよ』と言つたので僕も前の家のおばあさんも大笑ひしました。

友の死

京橋區 鐵砲洲尋常小學校

第四學年女

金杉 ふじ子

『母さん病人だからカステラの方がいいでせう』。『そうね、それならカステラを買つ

て行きませう。』

そんな話をしながら、私と母は京橋から芝橋行きの電車に乗った。幾度、母に、『まだが、まだか。』と聞いたかわからなかつた。

家について案内をこふと、友の妹が出て来た。『今朝死んだわ。』と妹が言ふか言はない内に小父さんが出てこられて『おやふじちゃんですか、よくきてくれました、くには今朝死んだんですよ、こんなことなら昨日の内にお知らせするのにな。』

『えつ、死んだ。』と、私は思はず口ばしつた。とめやうとしてもとまらない涙がほの上をつたはるのをかんだ。

電車に乗つてもなつかしい昔の思ひ出にふけてゐた。

『京橋つ。』と、いふ聲にはつと我にかへつてこしかけから立ち上つた。

大地震後の二三日

京橋區 泰明尋常小學校

第四學年男

杉山祐次郎

大震のすんだ二日の日に僕はお濱離宮に居た、朝目をさますと夕べからもえてゐた

汐留驛の石炭がまだもえてゐた『何時になつたら消えるのだらう』と思つた。しかしもう築地邊の火はもう見えなかつた。そのうちうんよく持出したかい中時計を見たらもう八時だ、八時だと言つてもどうすることも出来ない。ふだんなら御飯を食べてゐるのだが御飯などはないたい水ばかりである、止を得ず生水を飲んで居た、兄さんや僕は飲みつけて居たから平氣だつたがお祖母さんやお母さんはおこまりの様子だつた。そのうちに『つなみが来るかもしれない』とのうわさがあつたそれで僕等はこゝで又水攻めになつては折角骨折つて持出した荷物だいなしだと思つたので少し考へた。なににしてもここに居ては食物が無いからと言つてお濱離宮を出ようとしたが橋が落ちてゐて出られない。それでお父さんが小僧一人つれて道をさがしにいらつしやつた。少ししたつと歸つていらつしやつた。うかがうと道があるさうだそこを通つて日比谷公園に行つた。翌日櫻田本がう町の小松屋さんへ行つておむすびをいたゞいた。これが震災後一番始めの御飯だつた。

元の銀座

京橋區 泰明尋常小學校

第四學年女 香 取 文

元の銀座は西洋造りの三四階のりつばなたてものがならんでゐました。銀座ビルディングは九階でありました。又大會社や大商店がたくさんありました。

自動車や電車がひつきりなしに通つてゐました。夜になるとたくさん電氣がついて晝のやうでした。又人通が多くて大ていの人はおしやれをしてゐました。九月一日の午前十一時五十八分にあつたあの大地震と大火事であんなにぎやかな銀座があんなに骨になつたりはいになるなどは誰でも思ひませんでした。焼けたばかりはこれが銀座かと思はれましたがだん／＼にばらつくがたつて十一月十三日から電車がとほるやうになりました。銀座を復興するには私たちです。これからけんやくをして清い心で勉強をいっしょうけんめいしようと思ひます。

九月一日のおもひ出

京橋區 築地尋常小學校

第四學年男 江 口 政 一

朝學校へいつて式がはじまると校長先生のお話があつて家へかへつて晝ごはんを

たべうようとしたとき、きふにぐら／＼ゆすれてきた地震だといつておみせのたはらのよこにちひさくなつてゐた、やんでから外へでた、たふれた家もあるし、かはらがおちたうちもあつた、よこちよのあげばへいつてゐると川の水がだんだんあげてくるつなみがくるといつてみんな本がんじへいつて、いてふの木の下にゐた。よるになると淺草のほうも銀座のほうも眞赤になつた、火の子が雪の様にふつてくるこれではたまらないとこんどは明石町へいつてみるといつぱいでとほれない、こんどはどこをどうとほつたかわからないが、ひびやこうゑんへいつたのは一時ごろであつた。のほらにゐると、三時ごろよその人か子どものゐなくなつたのをさがしてゐるいて、もうきちがになつた人もあつた、五時半ごろにはまつかな大ようが東の方にあがつた。

大地震の時をかへり見て

京橋區 築地尋常小學校

第四學年女 藤 園 坦 子

九月一日からあくる日にかけては私たちが生れてから一番おそろしかつた時です。今考へて見れば家には井戸もあつたし、天水桶もあつたのだから佛様のお道具ぐ

らひいれておけば助かつたのと思ひました。しかしあの時はほんとうになにがなんだがわからず唯こはいこはいと思つてゐたのでした。私はすぐげんかんのおとなりへやにお机があつたのだから學校のお道具もだせばだせたのでした。おめんじやうやめたるもふるしきへいつしよに入れてこしへでもゆはへつければちやんと出されたのに、けれども地震の時にはそんな事は少しも考へつかなかつたのでした。私はあの大火事の最中ごぶの中へはいつて時々ふごんをどけて向河岸の焼けてゐるのを見た時にはほんごにこはいこはいと思つてゐました。

二日の二時頃です、半藏門のごとの上で麴町の焼けてゐるのを見た時には又昨晚の様に苦しむのかと思ひました。二日に中野へ避難するごちゆう三輪車に乗つて行きましたらば、人がふりかへつて見てをりましたがべつにきまりが悪いとは思ひませんでした。私たちはこれからいつしやうけんめいに勉強して復興につごめようご心がけてゐます。

震災の思ひで

京橋區 京華尋常小學校

第四學年男

加瀬 正夫

朝起きて見ると何だか蒸暑いやうな日で有つた。ちやうど第二學期の始業式の日なので學校へ行つた。かへつて来て間もなく十二時少し前頃、夢の様な大地震、たちまちかべは落ち瓦は飛ぶ、僕は思はずころげた、人々ははだして逃げるやら泣きながら逃げるやら、けが人や病人を醫者の所へつれて行くやら、もううろたへてしまつた。日は暮れて夕方ごなつた。四方八方が火事なので見てゐるとだんご物ごくごなつて來たこれはあぶないと思つてこはご丸の内に行つた。もう満員でおしつぶされさうである。やつごひなんする事が出來た。

それから時々地震が來た。火事は夜になればなる程盛である、夜中の一時頃になつてもまだ晝の様に空は明るかつた。おなかもすいたが食物がない、空腹ご不安の内に第一日の夜はあけた。第二日になつた青山の知人からおむすびをもらつて來てやつご饑えをしのいだ。高圓寺にひなんしやうごとしても自動車が一台もなくその日も又野宿する事になつた。この晩は彼の○○さわざでござろかされたが、陛下のお庭先の事だから巡查や憲兵たちがたくさん居て外の所程こわい思ひをしなかつた。三日の朝になつた。火はまだもえついでゐる。まひごや人を尋ねる呼聲は晝も夜も

たえまなく耳にひびいてくる。
その内にやつと自動車一臺たのんで子供と病人を先にひなんさせ、後のものは夕方になつてから貨物自動車一臺で、やつと三軒のもの二十人が雨の中を高圓寺にとひなんした。

節分の夜

京橋區 京華尋常小學校

第四學年女

金子ヨネ

今日はうれしい年越だ、内の中では大きさはぎ、

聲はり上げて歌つてる、おには外……………

福は内……………ごら聲だして歌つてる。

坊ちやんぢやうちやんいい聲で

お内の中をかけまわり、豆まきながら歌つてゐる。

おには外……………福は内……………可愛い歌をはり上げて、

坊ちやんぢやうちやん歌つてる、

今日はうれしい節分だ

大震災

京橋區 月島尋常小學校

第四學年男

伊藤克己

時は九月一日であつた。

僕が朝起きて見ると天は曇り雨は降り風は吹き、なんといふ日であらうと思つた。

僕は學校へいつた時はも早や雨はやんで居たが空はまだ曇つて居た。

其の日は先生からのお話をきいて家にかへつて活動寫真館の前で看板を見て居た時に、急に自分の身体がぐら／＼するのなんだらうと思つて居た。

すると各所では地震だ／＼と大ききとなつた。

見る／＼中に方々の家はくずれしあたりからはたすけの聲が高くきこへて來た、大地震はやんだが其の後で小さな地震はたびたびあつた。

時間がすぎて本所、深川、淺草、日本橋通りが大火となりだん／＼と月島の方へとせまつて來た。

その中に、も早小田原町へと火はうつつて来た。

月島の人達はまさか川一つへだつて居るのだから燃へるはずはないと安心なものだといつていた。月島はたゞ津波の用意をすればよいといつた。

する中風はだん／＼と強くなるばかり、電気は消えてしまつてくらやみとなり、九時頃になつた、する中巡査が二號地に火がついたから、一時も早く逃げろとの事で人々はそれ／＼どこかへ逃げ始めた。私も父母や兄さんたちと初見橋の上に逃げた、そこへ行くに皆助けて／＼と云ふ聲があちらこちらからきこへ始めた。その中に船が来てたすけてくれた。恐ろしい大火は月島をなめる様に一度にやいてしまつた。

二日の日岡に上つて見るとまるで焼野原である、人々はそれ／＼とたんを拾ひかちの家をこしらへて、そこにひなんした。私達も月島學校の前にひなんして、あちらこちらを見てあるいたら月島小學校のそばに犬が一匹と、女の人男の人が一人づゝ死んで居た。あちらこちらにもだいぶん死んで居た。

さあ食物にこまつて来るし、水は無いといふさはぎ、のどはかはいてくる、中には海の水をすくつてのんだ人さへもあつた。

おたぎりをもらつて食べた時のうれしさは忘れられない。どの人も皆こじきの様なふうをしている。相生橋はをちて向岸に行く事も出来ず渡船はないし何も買に行く事も出来ず、二日ばかりはほとんど何も食べず飲まずに居ました。

其の中食物はある様になりましたが充分には来ませんでした。前の日の事を考へるとまるで夢の様である。

夢であれば一時も早くさめればよいと思つて居たが、やつぱり此の大震火災はほんとうであつた。あゝ何といふ恐ろしい大震火災である。本所の被服所で何万といふ人が死んだぞうです。

今ではそこに線香やお花の上つてゐない日はない。何と云ふ恐しいあくまのわざであつたであらう。

あゝ何といふ恐しい大震火災。

冬の朝

京橋區 月島尋常小學校

第四學年女

荒木

てる

『お、寒い〜何だか起きるのがいやだわ』と妹がいつた。

見ると妹はふとんにほゝをつけて首をちぢめて小さくなつてゐる。私は『かめのこが首をちぢめてゐるやうだわ』とふき出すと『いゝわよ寒くてしかたがないのですもの』とおこつた。私は寒くてしかたがないのだけれども起きて便所へいつた。

歸つて来て二階の窓から表を見ると洋服を着た人が幾人かで歌をうたひながら通りすぎる。あとから女の人はシヨール、男の人は帽子をかぶつて一歩々々歩きながら通るのが見えた。顔を洗ひに井戸端へいつてポンプをついたがどうしても動かない。お湯をもつて来て入れると水が出たので急いで顔を洗つて着物を着かへてゐると大時計が七時をうつた。御飯を食べて學校へ出かけたが道路がかたく氷つて歩くどすべつてこるびそうになつた。

私は 『氷つた氷つた厚氷、

小池も小川も田の中も

今朝一面厚氷

氷つた氷つた厚氷』

と歌ひながらいそいだ。

焼野原も今は

京橋區 南槇町尋常小學校

第四學年男

柴田幸太郎

去年の九月一日の大震災があつてから、五ヶ月はさつて、もう二度の雪を見ることになつた、今は到る處に復興々々といつて、其の聲かまびすしく、どこにも復興と云ふ二字がかゝげられてゐる。あそこにもここにも運送馬車や、貨物自動車で焼けたものをとりかたづけたり、復興に使ふ材料を運んだりしてゐて、道がせまくてこんざつしてゐる。

空がからりと晴れた日などは、トタン屋根が光つて、まるで銀世界のやうである。今の分ではいつ大地震があつたか、わからない位に復興した。この東京市を一なめに焼きつくしたあくまも、今来て見たら驚くだらう。一日々々と家がたつてだんぐりにぎ合ふ様になつた。私たちもしばらく學校を休んでゐたが、今は新しい校舎が出来て楽しく學校へ通つてゐるのは有り難いことである。

濱離宮の一夜

京橋區 南槇町尋常小學校

第四學年女

佐藤 隆子

九月一日の大震災は天地をくつがへすやうな大地震であつた。私は母につれられていつともなしに、濱離宮のお庭に避難した。お母さんと一しよに、しらす／＼椎の大木の下に眠つた。

『津浪だ。津浪だ。』

と言ふ聲に目をさました。川が瀧の音のやうに／＼となつてゐる。火は盛んに天をこがし、火の粉は頭の上へこんで来て、身の置所もないくらいである。向ふを見れば、御門が盛んにやけてゐる、ふと氣がつくと、蟹がくびすぢへはひ上つたり、尺取虫が着物の尺を取つてゐるのが、火の光で手に取るやうに見える、家のことを考へると、焼けたか、焼けはしないかと、又お父さんはいかゞと、お母様と心配してゐるうちに、夜は白みはじめた。夜が明けてくるのと同じよに、火の手はだん／＼下火になつた。お日様はいつもより赤い顔をして東の空から静かにお昇りになつた。

記念の帽子

京橋區 明石尋常小學校

第四學年男

萬谷 富美雄

大正十二年九月一日午前十二時五分前あの恐ろしい地震が襲來した。

『火事だ／＼』といふ聲が人々の口からもれる。

もう七時頃は空一面眞赤に染められたのである。八時頃僕の家でも丸の内へ避難した。

二三日の間のごがかはいても飲む水はなし、食べたくてもパン一片もなくつかれきつた九月の四日自動車で巡查さんが玄米のむすびをくれる』と前に避難してゐる人がいつた。

僕はお腹のすいてゐるのもわすれて一もくさんにかけて出して自動車についた。

巡查さんが『入物を出せ』といつた、僕は入物を持つてゐないので困つた。

ふとかぶつてゐる帽子に氣がついてそれを出した。

巡查さんが帽子の中に山盛に入れてくれたおむすびを持ちかへつた時のうれしさ、避難してからはじめてお米をたべた喜、それを思ひ出すと今でも玄米のあとのついでるこの帽子をほんどにありがたと思ふ。

僕は此のありがたい帽子を永久に取っておくつもりである。

やけどされのねずみ

京橋區 明石尋常小學校

第四學年女

小 竹

マ ッ

私はゐなからこの東京へ出て来て幸福な日を送つて居た。ところが九月一日がたくと地がゆれた。私はその時天井にゐたけれどすぐにごぶの中へ逃げこんだ。地震はなか／＼止まないだん／＼晩になつてくると、人が皆さわぎだした、なんだらうと耳をすましてきいてゐると、『火事だ』といつてゐる。空を見れば成るほど火がえんえんと燃え上つてゐる。『さあかうしてはゐられない』氣の早い私はふるさとへ逃げて行つた。うはさに聞けば東京も家がたちならんだとの話、私はあの地震の恐ろしさも、火事のすごかつた事も忘れ喜び勇んで東京へとどん／＼急いだ。来て見ればがっかりしてしまつた。バラックと變つて天井のある私の大すきな家は一軒もなく私の家はどこかわからなくなつてしまつた。今は私の家をどこにあるともなくなつたかしいあのお家を見附けたいと只さがしてゐるのだ。あゝ早く天井のある元の様な家がたちなら

ぶとい。

我が校の建築

京橋區 越前堀尋常小學校

第四學年男

村 田

種 男

僕等の學校は震災のために焼けてしまつたので今こんな學校にはいつてゐる。

罹災民のバラックを三棟こはして僕の學校が建つことになつた。一月三十日三十一日に地ならしをした。一日にごだいをはめました。

二日に建前をするつもりであつたけれども雪がふつたので三日にのびた。四日には棟あげをした。

もうだん／＼家のかつこうが出来てきた。

五日六日とか／＼つて屋根のトタンや下駄箱や柱と柱の間に板をはつた。

七日にはつかをかつたり、ねだをはつたり、とよをつるものを作つた。八日九日とか／＼つて齋藤さんのバラックの方の校舎のしぶをぬつた。それから各教室のしきりをした。

十日は教室を作つた

十一日の紀元節の式は新しい校舎の方でやりました。

十二日にはこの教室の前の裏の方の校舎のしぶをぬりました。

十三日はかく教室の板と板の間にはめいたをうちつけました。

十四日は僕等の前の教室のしぶをぬつた。十五日十六日とかゝつて教室のはしごだんをみなつけた。

十七日には建具をみなはめた。

晝頃は建具のがらすをはめた。十八日には裏の方のかいてん窓を大工さんが二三人でつくつてゐた。

あとの大工さんは十七日にきりあげました。

二十日か二十一日にはきつと新しい學校で勉強ができるのであらう。

九月一日の思ひで

京橋區 越前堀尋常小學校

第四學年女

山田みのる

あゝあの事を思ひだすとむねがごき／＼します。大地震大火事の中で人々といつしよに私はづいぶんくろうをしました。今はぶじで居る事を考へだすと私はなんと幸福でせう。けれども焼死した人々と思ふとほんとうにかはいさうです。私は火事のまつさい中の時船にひなんしておりましたが、火事船が来てどうしてもはなれませんでした。船に火がついてしまひました。皆の人がタスケテ／＼とさけぶ聲はまつたくみじめなあり様です。

食事も四五日たべなかつたのでづいぶんおなかゝすきました。しかたがないので私たちは島へ行こうと思つたら島が二つに割れたと言ふ事を聞いたのでおそろきました。いつて見たらそれはうそでした。山がはげになつておりました。

私はしばらく島の學校へ通學しておりましたが、今はもと通つたなつかしい學校へ来て居ます、これからは元のやうにいつしやうけんめいで勉強しやうと思ひます。

震災に出あつた私たち

京橋區 月島第二尋常小學校

第四學年男

天野正一

私達はあのおそろしい震災に出あひました。

其の時はもうむちゆうでした。私はあの大きな地震がゆすつた時にはすぐ外へ飛び出しました。

たなの物や色々なものがおちてしまひました。其の内にだんくにおさまつて來たので、家へはいつてかべ土などをはいて、地割のしてゐるところをうづめてゐました。其の間に幾度ゆすつたかしれません。其の内に向ふ岸の藏前の工業學校がもえはじめましたから、時計を見たらちやうど午前十一時五十八分で止つてゐました。

水道は止つてゐるし水はちつともないので困つてゐたら、電車通りでだしてゐるといふので、さつそくいつてもらつて來ました。其の内に黒江町の方がもえだしました、しまひには方々もえあがりました。私の家ではさつそくにげるしたくをしました。

其の内にドーンと云ふ大きな音かしたのでみんな外へ出て見ることも渡邊倉庫がもえ上りましたので、私達はさつそくにげはじめました、もう電車通りは人が一ぱいでました。

そこを一生存けんめいにげて行きました。中には車を引いてにげて行く人も、少くありませんでした。私はあの時の事を考へると、ごうしてにげられたかと思ふ位です。

海の方を見ると帆まい舟がやけはじめました。その内に水泳場がもえはじめました。少ししてゐる間にとう／＼やけおちてしまひました。其の内に夜があげましたから、母が方々見てゐると、私が三十一日まで通つてゐた有明水泳部のこつてゐましたから、さつそくそこへ行きました、すると先生が芝浦から玄米や、うどん粉などをたくさんかつて來てそれをたべさせて下さいました。

其の時のうまかつた事は何とも言へませんでした。五日目にやうやく父母が焼けあとをかたづけに行きました。海の水は眞赤だし、魚は死んでうき上つてゐました。六日目に渡邊倉庫へはいりました。八日目にすぐホツタテ小屋を建て、はいりました。私

はあ時の事を考へると、學校の道具一つ出さなかつたのが残念でく／＼なりません。私はあゝいう時には心をおちつけてなんでもやらうと思ひました。學校では震災後色々な品物をたくさん下さいました、其の度毎に先生が之は外國からです、之は大阪からですとおつしやつて下さいます、この御恩はけつして忘れません。

大 震 災 の 時

京橋區 月島第二尋常小學校

第四學年女 松井満壽子

十二時近くに時計の針はまわらうとします時でした。急に私の家はこはれるばかりにゆすぶれました。私はおどろいてはだしのまゝ夢中で表通りへにげて行きました。近所で赤んぼうのなくこゑや人々のさわぐこゑで、さはぎでした。水道電氣は止つてしまひました。其の時私は水の大節な事を感じました。日は暮れてやがて月島の町の空は一面に火の粉と變つてしまひました。さつそく私たちはめい／＼小さい荷物をもつて、三號地へとにげました、廣い三號地も人の山でした。二號地も火の海となつてなつかしい私達の家は火につゝまれてしまひました。人々は『どう／＼やけてしまひましたね』まさか二號地はやけないと思つたのに』と云ふ話や色々の聲がきこえます。私はたゞふる／＼ふるえてゐました。

忘られない九月一日

京橋區 京橋尋常小學校

第四學年男 岩井伊之助

僕が學校から歸つて遊んで居た時の事で有つた。がた／＼みり／＼といふ音と共に

屋根の瓦が落ち出したので、僕は地震だと氣がついてよその内へ飛こんだ。裏の土藏は土煙を立て、くすれる。古い家はつぶれ始めたので、僕は命がないと思つて外へ出た。お母さんは僕が何所に居るだらうと思つて、聲のありかぎりよんでゐたので、返事をしたら、お母さんは安心した様で有つた。方々の人の顔を見れば病人のやうに眞青な顔をしてゐる。僕は近所の人と河岸へいつしよに出た。橋を見れば眞中程の所からおこちさうである。道は所々地われがしてゐる。皆が火事だといふので、見れば有樂町あたりからすごい煙が立上つてゐた。僕は結城さんの、おばさんたちと道路局へにげこんだ、しばらく立つたらお母さんが向へに来てくれたので、お母さんと一しよに紀年館の前へと來た。それからそれ／＼の荷物をしよいお母さんと丸の内へおされおされ死の苦みでやうやくにげた。天を見渡せば血を流した様に眞赤である。その晩は丸の内野宿をし一夜をあかした。

燒野の東京

京橋區 京橋尋常小學校

第四學年女 保坂あさ子

一晩の内に山の手を残して下町はせんぶ灰にしてしまった。これはだれがしたのだらう、私はこれを悲しいとは思はない、いくら家は焼けても一つやけないものがあるそれは心である。

この心のない人はりつばな東京を造ることの出来ないかはいさうな人である。私たちはこの不仕合せがあつたために色々よい事をおぼえた。

それはせいたくをしなない事物をそまつに使はない事である。

いつしやうけんめいに正しい心で働いたりべんきようすれば昔の東京よりもつどもつとりつばな世界一の東京が出来るとせう早く世界一の東京を造らうと思ひます。

東京に歸る

京橋區 文海尋常小學校

第四學年男

山下 憲正

僕は九月一日に學校から歸つて、着物をぬいで本を見て居りました。突然ぐわらぐわらと大きな地震が來た。僕は驚いて『かんらく地震だ』と玄關へ飛びだした、間もなく地震がやんだので僕は急いで大通りへ出た。晝ごはんを表でたべたのは一時過ぎで

あつた。間もなく數寄屋橋あたりから火の手が上つた。其の火はだん／＼と僕の家をもおそつて來た。六時頃はあたりが眞赤になつた。僕の家では逃支度をして六時半頃には皆芝離宮へ逃げた。其の夜は芝離宮で夜を明かし、その翌日四谷の親類へ行つた。それから千葉縣に避難して三月ばかり居りましたが、そこから又八王子に行き、去年の十二月二十八日にやうやくこの東京へ歸つて來ました。

それからすつとこのなつかしい元の學校へ通つて居ります。本當に地震後始めて東京へ歸つて來た時の僕のうれしさはたとへ様もなかつた。

元の學校に歸つて

京橋區 文海尋常小學校

第四學年女

神林 喜美

長い間、谷中の學校にいつてゐましたが元日から元の學校に通ふ事になりました。そまつではあるが學校も新しい校舎が立ちました。併しごんなそまつな學校でもやつぱり元の御友達と一しよに勉強するのが樂しみです。お友達も段々ふえてきました。新しい校舎にはストロブが有りませんけれどさう寒くはありません。

相生橋

京橋區 佃島尋常小學校

第四學年男

小田 善一

私たちの月島は東京の内だけ共四方を海と川でとりかこまれてゐる。だからどこへ行くにも船でなければ行かない、けれども人だけなら舟でもよいが、馬車や、自動車はとも舟では行かない。ただ相生橋といふ一つきりの橋でやつと行つたり來たりするばかりであつた。だからこの相生橋がなければ島の人たちは荷物をよそへはこぶこともできなければよそから荷物をよこぶことも出來ない。ところがこれほど大切な相生橋も九月一日の火事の爲にやけてしまつた。

ちやうど今の月島は足のきかない人のやうだ。今月島の人たちは一生けんめいにはたらくてこのめちや／＼になつた月島を前よりりつぱなしやうとしてゐるが、それには相生橋を第一にこしらへるかこしらへないかと云ふことは月島が前よりりつぱにならぬかならないかと言ふことになる。だから一日も早く相生橋が出來れば良いと思つてゐたがやつと工事をはじめたからもうちき出來上るだらう。私はこの橋の出來上るを

一日も早いやうにといのつてゐる。

日本人の勇氣

京橋區 佃島尋常小學校

第四學年女

島田 あさ

大正十二年九月一日のお晝頃、東京も横濱も大地震で家はつぶれるし、火事はおこるし、人々はみんなそれは／＼はえらいなんぎをしましたので、日本中の人たちはみんなが大變きのごくに思つて、色々な食物やお道具や着物や本や筆や紙やたくさん送つてくれたり、お金を送つてくれたりして、まるで親類の家がやけたやうに心配してくれました。それから後さいなんに出あつた人たちは日本中の人にたすけられながら、もうありつたけの勇氣を出して働きましたので、灰になつた町も今では前のやうに立派になりました。學校などもそまつな建物だけれども、おけいこにこまらないうやうに出來るし、雨が降つても雪が降つても大丈夫になりました。それはみんな天皇陛下のおかげと日本の人がほんとうの勇氣があるからです。日本の人はいくら困つてもいくら苦しくても強い心を持つてゐるからだと思います。日本人には此の心があるから

よその國と戦をしても負けないし、國もだん／＼えらくなつて世界でもりつばな國になることが出來たのだと思ひます。

復興のお正月

芝區 鞆繪尋常小學校

第四學年男

加藤 元康

九月一日 思ひだしてもぞつとする。

あの震災の爲に東京の大部分は猛火に包まれてサバクの様な廣い／＼荒野になつてしまつた。その荒野となつてしまつた東京を人々は復興させようと一生けんめいにはたらいて居る。

其の内誰でも楽しいお正月が來てしまつた。しかし今年のお正月に門松をたててゐる家は少ない。

又七五三のおかざりも見あたらない。羽をつく音もさびしく聞へて來る。たこは復興氣分を持つて高く高くとんで居る。

年始の客も少ない様だ。非常に淋しいお正月を迎へた。

これから僕等の世界だ。これからよく勉強してもとの東京より一層美しい東京にしよう。暖い春が來た。望み多い春は來た。

復興のお正月

芝區 鞆繪尋常小學校

第四學年女

東條 糸子

復興の第一の正月がまゐりました。

ついこの間まで火事や地震でさわいでおりましたが月日のたつのは夢の様です。もう大正十三年の年となりました。方々の家々で國旗や門松を立てるのですけれども今年はこの家でも、しつそに／＼として私の家では國旗だけにしました。

そしてお父さんは御年始もほんごおやめになりました。私は何だか今年のお正月は、もの足りない感じがします。

森のお寺

芝區 御田尋常小學校

お寺のかねが鳴り出した
いままででつたお日様が
お寺のかげになくなつて
森のかげから三ヶ月が
青い光をなげてゐた
森のお寺の中からは
もくぎよの音がなり出した
しすがにきよよむぼうさんの聲が
さびしい森にひびいてた

犬の行方

芝區 御田尋常小學校

第四學年女

土田 美代子

この間まで内にエルと言ふ犬がいた。

吉野さんからいたったのでかはいいい犬であつた。私が何かお菓子をもつてゐると、「わん／＼」といつてしきりにほえる。そのほえる聲がほんとうにかはいいい。いつもお二階にばかり上つてゐるのでたまに下に來ると、通りがかる人を見てほへるのでこまる。この犬の一ばんすきなものは肉と卵とである。又おさしみもすきである。すきなものだと二三度しかかまらずのみこんでしまふが、きらいなものだと何時迄もぐちや／＼かんでゐる。

内の者が歸つてくるとちぎれるかと思ふほど尾をふつて喜ぶ。お母さんがお魚屋さんなどに行つてしまふとさびしがつて、「くん／＼」と鳴く。

おととひのおひるの時お二階からおろした。

すると小僧さんについていかうとするのを、お祖母様が呼んでとめるともどつて來たと思つたが又自分のすきなものが見へたのであらう、いそいでどつかにいつてしまつた。

小僧さんが歸つて來て聞くところ「ついてこなかつた」と言つていた。歸らないのでばんまでお母さんや私がさがしたがゐなかつた。おちい様も高輪や魚らん坂の方へさがしに行つたが、やつぱり見付からなかつた。そしてとうとう昨日も歸つてこなかつた。

二晩居ないのでほんとうに淋しい。今晚も歸つて來なければ三晩になる。内にゐる時はかわいがられてエルさんとさん付で呼ばれてゐた。今頃は寒かつてゐるであらう。内にいる時はふとんの上にてゐたが、どこにどうしてゐるであらう。ほんとうにあのかわいい犬はどこに行つたのであらう。すぎさつた色々な事を思ふとほんたうにかはいさうでしかたがない。學校から歸つてエルと言つても尾をふるものがないので實にさびしくてたまらない。皆があつまるとエルの話が出る。一寸犬が鳴いてもエルが歸つてきたのではないかと思ふ。

一月十五日の地震

芝區 櫻川尋常小學校

第四學年男

川 上 弘

十四日頃からなんだかいやに暑かつた。兄さんが學校からかへつて來て『地震でもありそうだな』と言つてゐました。十四日の夜は何もありませんでした。十五日の六時頃僕がちよつと目をさまして又ねやうとすると、急にぐらぐらと地震が來ましたか

ら、はねおきてげんぐわんの方へ行きました。そうしてお母さんが、がらすごをあけやうとしますがぐらぐらとがらすごがこわれてげたがはけません。やつと戸をあけてげたをはかないで出ました。お父さんは二階にゐたので、電燈がきえておりられなかつたさうです。それで地震がしづまつてからおりて來て、もうだじやうぶだと言つたので家の中へ入つて見るとたんすがたふれさうになつてゐました。それから電車が不通だから目黒まであるいて行つて、省線電車は動いてゐるかと驛で聞いて見ましたが、動いてゐないと言つたので家へかへりました。

お芋屋さん

芝區 櫻川尋常小學校

第四學年女

岩 下 員 子

今のお芋屋の伯母さんは『さあどいた』とお釜の前に集つてゐる子供たちをどけて、お釜のふたをとつた。お釜の中からは、白い煙がぱつと出て、むくくとひさしの間から上の方へ上つてゆく。伯母さんはあとからきた大人におせじをいひながらお芋をあげてゐる。『つまんないな、あたいが先にきたんだよ。』と子供たちはいつてゐるが

伯母さんは一錢や二錢はあど〜といひながらみんな賣つてしまつた。私はそれを見てもし私がお芋屋になつたら小さい子供たちに先に上げて大人に新聞でも見ながらまつてゐてもらはうと思つた。

バラツクへすむ前

芝區 南海尋常小學校

第四學年男

板垣 義久

私は今バラツクに住む一少年であるが、元は今のバラツクの一町ほど南に住んでゐた。私たちは其の家ですいぶんなんぎをしたのである。それはあの恐ろしい震災當時の事で、此の時家は今にも前に倒れさうになつた。其の家の前でねたり、たべたりしてゐた。地震がしづまつてから家へは入たが、どんな小さな地震でもこび出なければ命があぶないのであつた。

其の中東の方の三げんがどう〜つぶれたため、なほきけんになつた。その時一つ困つた事が出来た。それは高橋さんと云ふ人から、

『あなたの家がつぶれては私の家まであぶないから立ち退くかこわすかして呉れ』と

云ふので此の時は父も母も又どなりのおぢさんまでへいこうして何の返事もしなかつたので、高橋さんに、どう〜こわされてしまつたので、仕方なく住みなれた家と別れて一町ほど北の空地へバラツクを作ることになつたので、悲しい中でもよろこばしかつた。其の中やうやく出来上つて引越したが、元の家の有様が度々目の前にうかんでくる。僕の家のお父さんは三田に永らく住んでゐて知り人も多くあるので、家越がいやで、元の家の様なぶつさうな所がまんしてゐたのである。バラツクへ越してから、一番わかりいゝところへ、父の名の板垣久三立退先と記した札が出してある。

芝 公園

芝區 南海尋常小學校

第四學年女

柳川 貴美子

もう二月の末になりました。いつになく暖かなので、芝公園の梅が咲き始めたと聞きましましたから、行つて見ましたら、もう三分通咲いてゐました。あと四五日たつたら、みごとに咲くでせうが、去年の恐ろしい大しんさいで、大隈さんの銅像の前から一ぱいにバラツクが、建ち並んでゐるので、公園の景色が悪くなりました。それでもバラ

ツクに住んでゐる人たちの事を思ふと、氣の毒で／＼なりません。私は、このバラツクに住む人たちを見ると、何時も煙につままれた、東京が思ひ出されます。そして其の時の恐ろしかつた事が、あり／＼と胸にうかんで来て身ふるひがいたします。此の人たちは、どこから来たのでせう。ごこの火の下をくゞつて来たのでせう。きつと死にもものぐるいで、にげて来たにちがいない。死人の上をこび越へたり、焼けた荷物の上をのり越へたり、其の上食物になんざしながら、命だけ助かつたのでせう。今あゝしてバラツクにゐますが、どんなにか不自由が多いでせう。早くお家をこしらへて自分のお家へ歸られるやうにして、あげたいと思ひます。櫻が咲く頃までにバラツクがなくなるでせう。そうすれば公園は元のように美しくなりませう。そしてたくさんの見物人がぎあふ中に、バラツクに住んだ人たちもまじつてきれいな花をながめるでせう。

九月一日の大震火災

芝區 白金尋常小學校

第四學年男

井垣泰尚 (十二才)

あの恐しい事は、永久に忘れられない。思ひ出してもぞつとする。長い夏休がすんで、始業式から歸つて、お友達と、勉強部屋で銀行ごつこをして面白く遊んで居た。お母様が、『御食事をしませう。』とおつしやつた時、にはかに部屋が舟に乗つて居る様にぐら／＼動いて来た。初は今に止むか／＼と思つてゐると、ます／＼ひどくなつて、壁や、がくや、天井につつてある物は、えらい勢で落ちて来た。方々の屋根のかはらががら／＼落ちて来る。お友達や弟と一しよに、お母様にだきついた。皆の顔色は、眞青だつた。やつとおさまりかけたから、いそいで外へ出た。又々、第二震がやつて来た。前に變らぬひごさである。どうなる事かと心配して居ると、材料廠の方から眞黒な煙が、勢よくあがつて、火の粉と共にどん／＼やつて来た。皆は一聲『さあ火事だ。大變だ／＼』と又々さわぎ出した。

地震は、のべつに、第三震第四震とやつて来る。皆生きてゐる心持はなかつた。自動車ボンブが、やつて来た。いくらか安心したと、間もなく高輪東宮御所が焼け初めた。材料廠は、薬品が破烈して、恐しい音を立てて、ます／＼焼ける。東宮御所は、幸に早くやんだ。

やつと四時頃、お祖母様やお母様が、地震の合間に、作つて下さつたにぎりめしで、お晝をすました。近所の人々にも差上げた。生れて初めて外で御飯を食べた。お腹は

すいて居たが、恐しさで胸が一杯で食べられなかつた。夜になつた。電燈はむろんつかない。らうそくをつけて野宿した。お祖母さんとお母さんが工夫して、ねる様にして下さつたが、仲々ねむられない。下町は今、もうれつな勢で焼けて居る。お祖母さんやお母さんは「お父様がおるすだから心細い」とおつしやる。心安い方は、皆心配して見まひに来て下さる。常なら泊つて居らつしやるのに、今日はすぐお歸りになる。姉さん、二人は、電車通に行つた。「今下町がひどい勢で焼けて居るのを見て居るとぶる／＼ふるへて来る」と言つて、歸つて來られた。起きてゐると何んだか恐しいから、眠られないのをむりにねた。翌朝、水道は出ず、がすも出ないから、水汲みに行つて又々戦争の様なさわざをした後でするぶん焼けて、澤山の人死んだことを聞いてびつくりした。僕達は、幸に無事であつたが、こんな事が、又どあつたらどうしようと思つた。

バラツクの人達を思つて

芝區 白金尋常小學校

第四學年女

千葉

光 (十二才)

此の寒いのにバラツクの人達は、どうしてゐるでせう。わすれる事の出來ない九月一日の大火災の爲に、焼け出されたあのバラツクの人達は。

私達は暖い家に住み、此の白金小學校に通つて、皆さんと御一しようにたのしく勉強してゐられますのに、寒い／＼バラツクの家に住む子供達は、バラツクの學校で何が出來ませう。

はなれ／＼になつたお友達を、どんなになつかしく思つてゐるでせう。

地震前まではんぢやうしてゐた此の大都會も、九月一日の火災の爲に焼けてしまひました。そして日に／＼ふえて行くのは白いバラツクです。

いつになつたらもとの大都會になりませう。私は早く前の東京となつて、バラツクの人達がめぐまれるやうにと、祈つて居ります。

冬

芝區 櫻田尋常小學校

第四學年男

杉原芳太郎

寒い冬の朝早く方々のとたん屋根を見ると、銀色の様な霜が下りてゐる。地面も白くでこぼこしてゐる。又手洗鉢などは氷がはつてゐるし、又雨だれやながしなどはつらゝが下つてゐる事もある。

けれども晝頃には春日和の様に暖くなる日もある。ごんな寒い朝夕でも新聞屋や牛乳配達などはいせよく走つてゐる。

夜は火の番がカチ／＼と寒いのに火の用心をして廻る。而し今年はまだ雪が降らないと思つてゐたが、此の前の一月廿七日の日曜の朝雪が積つてゐると云ふので喜んでとび起きた。外へ出ると犬が勇ましく飛び廻つてゐた。屋根は一面に白布を敷いたやう、父が恩賜金で記念の爲庭に數本の檜の木を植へた。それに雪がかかつて實に見事な眺であつた。

お友達へ

芝區 櫻田尋常小學校

第四學年女

江川 こう子

お手紙をまことに有り難う存じました。元の私の學校は理科の道具や、其の外色々の

物が揃つてゐましたのに、大震災にあつてやけてしまいました。焼けた後きて見ると焼け野の原になつてゐたので、私は涙が出てしまいました。

今學校はバラックで建てゝゐます。そして南櫻と云ふ學校と二校で使つてゐますから今は二部教授です。先生方も大そうおいそがしいやうでございます。私たちは方々から學用品や色々なものをお送り下さいましたので、おかげさまで大した不自由もなく勉強してゐますから御安心下さいませ。

四年の級のお友だちは、ずいぶんへりませんが、日がたつにしたがつて元のお友だちが、ふへてくるので、うれしくなりません。

東京はだん／＼と復興して、今は震災前のやうにバラックではありませんがたくさん家がたちました。そしてにぎやかになりました。

私も之から一心になつて勉強するつもりです。皆さまによろしく申し上げて下さいませ。

我が家

芝區 南櫻尋常小學校

第四學年男

大久保正道

昨年の大震災火災で我が家は焼けた。それで今では前よりも半分ぐらゐな家で暮してゐる。

今の家の間取りはげんくわんが角、其の隣へ薬局其の次へ診察室其の次が六疊其の次が臺所である。又ろうかの突當りが風呂場その隣りが四疊半其の次が便所である。そうしてろうかに押入が二つあるきりである。何といふせまい苦しい家ではないか。僕が家に居ると皆んなが一日笑つて居る。僕がよく、レコードの茶目子の一日や、無い物づくしや、虫づくしをまねる。無い物づくしが一番面白い所は『さても無い／＼無い物は、坊主にかんざしさが無い。砂地に小便たまりがない』此所である。又落語のまねもする。だからよく姉さんが『正ちゃんえ、小僧やを一せきやりなさいよ』などとおしやるこゝろがある。

晝からはパンにコーヒーでお八ツをすます。パンを買ひに行くのは僕の役目である。

我が學校

芝區 南櫻尋常小學校

第四學年男

小崎正明

僕等の學校は思ひ出してもどうつととする、あの震災火災の爲にはいとなつてしまつた。今はまわりのれんがべいがつくねんと残つてゐるだけで、中にじむしよとバラックが建つて居る。元は理科室も唱歌室もあつた。運動場は廣くて砂場もあつた。砂場の中には機械体操も、こていえんぼくも、竹のぼりもあつた。又二階もあつた。屋内体操場もあり、横には物置もあつて、中には飛箱もまりもあつた。じむ室には小さな軍艦もあつた。又裁縫室もあつた。それが今は理科室も屋内体操場もない。櫻田のバラックで二部けうじゆをしてゐる。僕は前の學校がこひしい。僕は勉強して帝都を復興させ、僕等の學校をりつぱにしたいと思ふ。諸君共にごりよくして、りつぱな學校を建てようではないか。

震災後の町の様子

芝區 南櫻尋常小學校

第四學年女

角田知榮子

もう焼瓦も大かたかたすきました。地震前に大そうにぎやかであつた所も、今はきみ

の悪い程さびしくなつた所があると思ふと、元淋しかつた所が、今はかへつて、にぎやかになつた所もあります。そして骨ぐみだけ焼け残つた、高い三階四階などの家があちらにもこちらにもつきたつて居ます。大仕掛で材木を山の様に運んできて大ぜいの人がさもいそがしさうに、仕事をしてゐる所も あります。裏通りでも大工さんの居ない所はない位どこでもかんなの音勇ましく、一しやうけんめいに家を建ててゐます。表通りには電車が人を一ぱい乗せて走てゐるかと思へば、自動車がブー／＼音をたてて通り自轉車や荷車などが織るやうに通るので道がふさがつてしまふかと思ふ位であふなくてうつかりあるかれません。どこを見ても復興の氣分があらはれてゐます。

紀 元 節

芝區 芝尋常小學校

第四學年男

石 井 邦 輔

女神が金の鈴をころがした様な音がピアノのごとくから出て來たと思ふと、皆の口がひらいて、君が代の歌が歌はれた。

次に校長先生が勅語を奉讀なさいました。その時はあたりが、しんとして静まりかへ

りました。

今日は僕等の國の生れた日出度い記念日なのです。

僕等は校長先生から色々お話を承りました。日本の國はご世界で長く續いた國はない神武天皇が大和の國で天皇の御位に即かれてから、今年までの間に實に千五百八十四年の長い年月がたつてゐるそうです。

私等は此の日本の國民に立ばなみかきをかけて次の者におくらなければなりません。と云ふ校長先生の結びのお話です。だから一同紀元節の唱歌を歌つて式場を出た。其の日はお菓子を下さいませんでした。多分しんさいがあつたからでせう。

の ぞ み の 春

芝區 芝尋常小學校

第四學年女

東 田 タ ケ

こわい／＼と云ふ内にのぞみの多い春になりました。公園にはころぶ梅の花も何となく復興の香にみちてゐます。焼けつくされた木々も近い内に芽を出す事です。この間の御成こんのおよろこびも皇室ののぞみの多い春のお光であります。私のうちの近所

にはもうどん／＼新しい家がたつて恐ろしかつた、地しんも、火事も、〇〇〇もすつかり忘れる程になり、人々の心も元氣付き、子供たちのたわむれるにも、復興の氣分になつて遊んでゐます。此のさい私たちはなほよく勉強して、むだづかいをしないでりつぱに五年生になつて、何時も復興の二字を忘れまいと思ひます。私たちは今から咲きほころびる、花のやうにいせいよく楽しく、のぞみの春を迎へて東京市の復興を急ぐのであります。

遠い國の友に

芝區 西櫻尋常小學校

第四學年男

重子 房吉

御手紙下さいまして有りがたうございます。君のおつしやるやうに東京の名所、舌跡は一夜の内に全く、なくなりましたので、ぼくはがっかりしましたが、君たちの心にはげまされて今は地震前のやうに勉強してゐますから御安心下さい。君たちも勉強してえらくなつて下さい。

お向ふの犬

芝區 西櫻尋常小學校

第四學年女

吉見 文子

お向ふの犬の名はペスと申します。いつでも私が學校へ來るとき、ふざけながらついて來て、途中になると歸つて行きます。まだペスは小さいので、じやれてほんたうにかわいらしかつのです。このあいだ、ペスが足をいためた時に、私かなせてやりますと、ペスはくんくんくと尾をふりながら喜んで居たのに、おとゝいの朝、お向ふのおばさんが、なきさうな顔をしてペス／＼と云つて居ましたが、もうペスは死んでしまひましたよと云ふのを、私はきいてがっかりしてしまいました。お向ひのペスは今もう土の中にうすめられて、ごくらくへ行つて居るでせう。

御成婚の日

芝區 臺町尋常小學校

第四學年男

本多 保一 (十二歳)

一月二十六日は我々として最も記念すべきである。それは我が攝政の宮殿下と良子女王殿下の御成婚の祝日であるからである。朝の七時にはもう方方の家にたてられた國旗が風に吹かれて、さも、うれしさうにひら／＼と動いてゐた。

學校では式があつた。兩殿下の御話を校長先生からおききをした。きけばきくほど、有難くうれしく感ずる。間もなく大砲のひびき汽笛の聲が盛んにきこえた。すると校長先生の合圖で兩殿下の萬歳を三唱した。その時の氣持は何ともいはれなかつた。それから赤坂見附へついて、兩殿下を拜さうとしたけれども、拜されさうもない。ようようへいにつかまつてゐた。その内に向ふの方で萬歳／＼といふ聲がきこえた。見ると自動車のまわりを兵隊がかこんで走つてゐる。それは攝政宮殿下と妃殿下の御召自動車であつた。そのあとから、きれいな、そして勇ましい兵隊が澤山きた。あとで赤坂離宮を拜し、電車に乗つて家にかへつた。その時は三時五十分であつた。

雪の日

芝區 臺町尋常小學校

第四學年女

西村 和子 (十二歳)

朝起きて雨戸をあけて見ると一面銀世界で、どの木を見ても綿を乗せた様で有る。弟達は今日は雪だるまをこしらへるとか、雪つぶしをするのだとか言つて喜んで居た。小さな悦子まで窓から外を見ながら、

「あつちへ行くの。」

と言つてゐる。私やお兄さんが

「おんもは寒いからだあめ。」

と言つてもきかないので仕方がないから私がおんぶして外へ出た。弟達も續いて出た。外へ出て雪を固くまるめて、おだんごを造つて遊んだ。冷い指先は、とれそうになるがそれでも止められない。

晝から弟たちは、近所の子供たちと一處に雪ぶつけをするのだといつて行つてしまつた。

其の後で私は火鉢にあたりながら悦子のはく靴下をあんで居た。雪の日は何となく静かな落ち付いた心持がする。私は靴下がだん／＼出來上つて行くのが面白くて雪の事も忘れて居た。

帝都復興

芝區 三光尋常小學校

第四學年男

石川

篤

火煙を浴びて無我無中になつて逃げ出した人々も今は一心になつて働いて居る。僕はバラックの方へ行つて見た。表面から見ると、まるで花の都會の様であるが、裏手に廻ればごみ箱の様になつてゐる所が多い。表面から見た様に立派にしなければならぬ東京中の人の此の頃の様に働けば、これから何年か後は前東京よりもすつと又世界で有名な都會になるだらう。それを思ふと僕はうれしくてたまらなかつた。之から後世界一番の都は東京市であると云はれるやうになるのもまもない事と思ふ。

新年

芝區 三光尋常小學校

第四學年女

増田

マキ

思ひ出の深い大正十二年も過ぎて、私たちは大正十三年の新しい春を迎えました。さ

しのぼる朝日も、さはやかに鳥の聲さへも勇ましく復興の春をことほぐかと思はれます。私は何時もの様に若水で口をすすぎ、顔を洗ふと初霜をふんで氏神様へ初詣うで致しました。石段より見下ろせば、立ち並んだバラックの屋根々々がはるかに見えます。二三ヶ月前まで廣い／＼焼野原となつて居た東京も、もうこんな復興いたしました。總べての人がむやみに悲しんだり歎いたりすることなく、寒さもいとはず、目ざましいほど働いた御かげでございませう。一年の計は元且にありと申します。此の後は一層非常な勇氣と暖い同情を以つて助け合ひ、一日も早く以前にまさる、大東京をさすき上げねばなりません。御國の爲ならば石も運びます。土も運びませう。命のあらんかぎり、女ながらも、子供ながらも。

大地しんのあと

芝區 聖坂尋常小學校

第四學年男

五十嵐 徳太郎 (十二才)

あの地しんのあとで一番困つたのは水の無かつたことです。内には井戸がないので毎朝早く起きて、十五六間先まで水くみに行つた事もあります。

それについて食物の事も大へん心配しましたが、地方からどん／＼船で送つて下さつたので、そんなに不自由はしませんでした。本當に有りかたいことです。若し昔のやうに無線電信や舟がなかつたなら、どんなに困るでせう。ひどい大火事が起つた爲に、東京の三分の一は無くなつてしまひました。方々を見ると悲しい位です。けれどもどうしても元の通りに、又はもとよりも此の都を盛んにしなければなりません。それには私たちが、一生懸命に勉強して立派なものにならなければなりません。

復興の東京

芝區 聖坂尋常小學校

第四學年女

金田 千鶴 (十二才)

九月一日の震災で東京の街はたいがい焼けてしまつた。

上野の西郷銅像近くに立つて眺めると目の届く限りは焼野原である。淺草の十二階は見へない。兩國の國技館も骨ばかりの様に見へる。而し電車は文明の音を立て、盛んに走つてゐる。バラックは立つた。赤い土や、空地は殆ど見られない。小さいながら

も我が東京は、しつかりと生れて來た。あゝこれまでにする市民の人達の苦勞はどんなであつたらう。雨や風になやまされたことは度々である。我が東京の人は云ひ知れない多くの困難と、よく辛抱して來た

地方からよせてくれた、深い人情はかういふ時に、勇氣を百倍にしてくれた。私は教室にあつてもこの同情を涙ぐましい氣持で感謝して居る。淺草も出來た。銀座通りや日本橋邊も立派に出來上つた。復興の旗はひら／＼と復興第一の春にひるがへつてゐる

太陽

芝區 愛宕尋常學校

第四學年男

大和田 昇

此の間僕は母につれられてよそへ行つた。歸りに電車の中から向ふを見ると、今太陽が目黒のかやくこの森の方へかくれやうとして居た。太陽は赤々とした光を照らしてゐる。電車が動くにつれて段々見へなくなつてくる。もう少しでかくれそうになつたとき、次の様な事を心の中で思つた。

『太陽と云ふものは人間に取つては大切なものだなあ、太陽のそばへ行つたら、さぞ

あついだらう。又まぶしいだらう。一体どんなに熱があるのだらう、太陽が日週月年を越すのにすいぶん色々な事があるだらう。太陽はまりの様なものであらうか。それともまるく、すべつたいものかしらん。それを知りたいものだ。太陽のそばへ行く方々はないものかしらん』
思ひ終らない中に太陽はすつかり沈んで森のそばが眞赤になつてゐた。

晃

芝區 愛宕尋常小學校

第四學年女

馬場 惠美

家の晃は此の頃たつやうになつた。私はいつも『あんよは』と言ふと二足歩らくとすぐころげる。『おんぶ』と云ふと『いやあよ』と言ふ。よその人を見るとはすかしがる。『晃おはは幾つ。』と言ふと、『あ』と口を大きくあけるのでおかしくてたまらない。『晃馬はどうしてたべるの』と云ふと『するくくくべちやく』とする。春になるとさつと歩くと思ふ。いま晃のためにじやけつと、ぼうしと、あんでゐます。

八百屋さん

芝區 高輪尋常小學校

第四學年男

和田 章太郎 (十二歳)

家に来る八百屋さんは色は黒く丈が短いのです。

いつでも車に荷物を引いて家に来て『今日は何に致しませうか』と言ふとおかあさんが『今日は何が有りますか』と言ふと『人参、大根、さといも、三つ葉』と色々言ひます。『ほうれん草ありますか』と言ふと『有ります』と言つてかごの中のほうれん草を一本だけ出して見せます『おいしさうだね五六ぱ下さい』と言ふと、ニコニコ笑いながら六ぱ渡して又重い荷物をがら／＼引いて行きます

仕合の私たち

芝區 高輪尋常小學校

第四學年女

古谷 正子 (十二歳)

忘れやうとしても中々忘れる事の出来ないのは九月一日の大震災火災で有ります。最早

や半年前の事とはなりましたが、まだく其の時の様子がちらくくと目に浮んで來ます。仕合にも高輪尋常小學校は先生方にはなんのおかわりもありませんでしたが、残念な事には二年生のお友達を一人なくしたのです。

校舎も壁に少しのいたみはありますが、外にはなんの事もなくて、毎日おもしろくお勉強してゐます。何一つ不自由な事なく楽しくおけいこをしてゐます。然しバラツクの學校の生徒の事を先生から伺つて見ると、ほんどうにお氣毒の事です。涙が出て來ます。お机はなし、こしかけもなく、はかまもはかないで、御勉強してゐるといふ事です。

今日の様な、こんなに曇つた寒い日にはバラツクの學校のお友だちはどんなに寒いでせう。私たちは暖にストーブを入れていたからして勉強してゐるのは、少しせいたくかもしれせん。

考へて見ますと私達は仕合です。わがまゝや、せいたくわ決して出來ません。バラツクに居る御友だちの事や、あの九月一日に玄米のおにぎりをいただいた事を忘れないで、しつかりお勉強しませう。

暴風の朝

芝區 神明尋常小學校

第四學年男

島田 定彦 (十一才)

夜中から吹きだした風はまだやまない。

朝おきて顔を洗つてゐたら、ガタ／＼ピュー／＼といふと、屋根のどたんが、バタン／＼といふ度に家がグラ／＼とゆすぶれる。

しばらくして窓の方で、ガタンツと物凄い音がしたので、顔の洗ひかけのまゝ飛んで行つて窓をあけて見たら、家の屋根のどたんの落ちた音で有つた。僕はお父さんに、「お父さんどたんがおつこちたよ」と言ふとお父さんは「ふむさうか」と返事をしておちいさんと屋根へ上つてトン／＼とすぐにどたんをつけてしまつた。

それからおちいさんやお父さんやおばあさんがお茶を飲んで居たらピューツといふと家がグラ／＼とゆすぶれた。

今までのより大きかつたので僕はすぐに「お父さん地震じゃないの？」と聞いたら「いや地震じゃない。」と言つたので安心した。

ほんとうに暴風はこはい。

今度の東京

芝區 神明尋常小學校

第四學年女

覺 張 と る (十一才)

今度のしん災で私の家も近所の家も焼けてしまひました。

そして私達が「此處より好い處はない」とじまんしてゐた大東京は廣い／＼焼野原となつてしまひました。けれ共すぐ方に小屋が立てられました。その小屋は焼とたんで造つたそまつな家でした。しんさい當時は食物も不自由でしたが、今では十分に食べられる様になりました。又家もやけどたんでなくて木で造つたバラックが立ちました。中には立派な壁をぬつてかはらまでもつけた家も有ります。又しん災前よりは物がやすくなつた様です。人々は復興々々といつて一生懸命に働いてゐます。そしてそこゐらに、「おたがいに復興につとめませう、」と紙にかいてはつて有ります。私もみんなと一處に働いて勉強してこの焼けた東京を、もとよりも、もつ／＼と立派な美しい都にしようと思掛けてゐます。

地震の思出

芝區 神應尋常小學校

第四學年男

石 川 實

去年の九月一日、二百十日の日で有つた。

朝からあれもやうであつたが十時頃から晴出した。丁度お晝頃急に地震がゆりだした。驚いて家中の人が皆顔を見合せた。誰を見ても眞青で有る。又二度目の大地震がぐら／＼とゆりだした。と見るととなり
の瓦ががら／＼と落ちてきたので、出られなくなつた。しづかになつてから外へ出て
みることもうたくさんの人たちが、ひなんしてゐた。内からごさをもち出してすこしや
すんでゐた。會社へいらつしやつたお父様が、かへつていらつしやつたので、やつと
安心をしたが、まだ學校にいつていらつしやるおちさんが心配で、おけがでもなければ
ばいいがと皆心配してゐた。あまり暑いのでおかさをさしてゐた。三時頃になつて弟
がおやつをちやうだいといふので、お母様がお菓子を買ひにいらつしやつたが、なか
／＼なかつたさうである。

その中におちさんがかへつてゐらつしやつたので皆安心した。其の中に入道雲がもく／＼と出て来た、今度は雨が降るかど、お父様やお母様が心配をしてゐらつしやつた。入道雲だと思つたのはまつたくのちがいで、大火で有つたのだ。其の夜は誰もろく／＼はねなかつた。

明る朝顔も洗はず、外へ出てみるとまだ空は火の海である。其の火の夕方から、てんごを張つて皆其の中に入つてねた。けれ共、まだそれからしばらくの間はよくねむる事が出来なかつた。地震も何度となくやつて来るし、火事のやうすが目にうつる様な気がして。

あゝ忘れようとしても忘れられない、あのおそろしかつた去年の九月一日。

大地震の思ひ出

芝區 神應尋常小學校

第四學年女

中村百合子

思へば九月一日の十二時頃でした。私がお姉さんと、けしやうべやで自由人形や、おまゝごとの道具などを出して、お人形さんごっこをして居ますと急にぐらく／＼ぐらつ

と立つても居られない程の大きな／＼、地震がありました。私はびつくりして何もかゝんがへずに、けしやうべやの窓から飛び下りました。

下りてからはもう夢中でたゞ「お姉さん／＼」と大きな聲でさけびつゞけるばかりでした。やつと二三間歩いたと思つた時、急に屋根の瓦ががら／＼落ちてきましたので、私はさんごじゆの垣根の中へもぐりこみました。やつとの事で島へ出た時は、もう家のつぶれた後でした。

すこしする中に、お姉さんは来る、おばあさまはいらつしやる、家の人はみんな出てきました。丁度私のお父様はおるすでしたので、みんなおとなりのおち様の所へ行きました。

地震が二三分毎にあるので、みんながこわがつて居ると、おち様が松の處へいつて、木につかまつておいでなさいとおつしやつたので、その通りにして居りました。半時間たゝない内に方方から火がでて色々な物のぼくはつする音がぼん／＼聞へます。私たちはもうこわくて／＼地面を歩く勇氣さへ有りませんでした。

それに、まはりの家々からは、わあ／＼泣く聲がしますので、なんだか生きて居る心持はありませんでした。

夜は三軒一しよになつて畠のどうなすの上へ戸板やむしろをしき、その上にかやをつつてねました。

火事はもう大丈夫だと思つたのに二日の午前二時頃小町へんが火の粉を上げてもえはじめました。

其の時はもうこわくてがた／＼ふるえ始めました。そしてにげる時の事ばかり考へて居ました。あとで聞きましたら、あの水交社の主人が地震の時鳥居のそばへ逃げて行つて、落ちた鳥居の下で死んでしまつたのださうです。

當時の事を思ひ出すと、今でもふる／＼ふるへてきます。

友の死を悲しむ

芝區 芝浦尋常小學校

第四學年男

多田正三

あゝ思ひ出せば身もぞつとするのは九月一日の大地震です。おそろしい火は勢よくもえひろがりました。にげまごふ市民をおひまくり東京市中やいて／＼やきつくすかと思はれました。そのまう火の中をからくものがれて來たものもきのみまのままです

む家もなく、おなかがすいてもたべる物なし、夜はやぐ一枚もたぬ、のじゆくゆめはしつとりとつめたくされるのでした。

私たちはその中でも、いのちびろいをしたのを、この上もないこうふくに思つてゐます。しかし不幸にも、なくなられた人たちのことを思ふと、私たちのむねは、はりさくばかりです。

君たちはきつとやがては出世して、國の爲め人の爲につくさうと言ふ志をもつてゐたのでしやうが、ざんねんにも、志なかばにおなくなりになつたのです。私たちは大そう君らをおしんでおります。けれどもすぎたことはしかたがありません。

私たちはなくなられたあなた方の、志をついでりつばな人になります。

バラツクの家

芝區 芝浦尋常小學校

第四學年女

安田宥子

私はもと日本橋に住んで居ましたが、九月一日の震災で焼け出されてバラツクの家に住まなければならなくなりました。私は何となく震災前の事ばかりあたまに浮んで

なりません。

バラツクの家はひとむねの中程で火をたけば煙が其のひとむねのこらすのぞきこんでくるし、子供が泣けばその聲が全体にひびきわたります。何でもこのどほりですから早くこゝを立ちのいて、もとの家の様な所に住みたいと思はない日は一日もありません。バラツクの家に住むなどは、死んでも忘れないほごいやな事と思つて居ます。お父さんお母さんも今すこしたつたら日本橋の方にうつると申してゐます。

地球

麻布區 麻布尋常小學校

第四學年男

井澤光男

地球は海と陸の二つで出来てゐる。そして、その廻りは凡そ一萬里もある。地球は其の形が球のやうで、其の廻りは空氣が包んでゐて、其の表面は高低になつてゐる。高い所が陸、低い所には水がたまつてゐて海となつてゐる。陸を分けて、アジア洲、亞弗利加洲、ヨーロッパ洲、北亞米利加洲、南亞米利加洲、大洋洲、の六つの大きな陸地とする。又海を分けて太平洋、大西洋、印度洋の三つの大きな海に分ける。陸の

中にも、又大小の高低があつて、その形によつて山、谷、平地等と名前がついてゐる。湖、沼は陸の上に水がたまつたもので、流れてゐるのが川である。地球を二つに分けて、一つを南半球、一つを北半球といひ、南半球の端を南極、北半球の端を北極といつてゐる。其の兩極の季節はすつかり反對になつてゐる。又兩半球の境目は赤道といつて、大そう氣候が暑い。日本は地球の東方にあつて、赤道と北極との中程にある。氣候の良い島國である。海の上を走る汽船、陸の上を走る汽車に乗つて、どこから西へ西へと進んでも、東へ東へと進んでも、元の所へ歸ることの出来るのは、地球の圓いことを示してゐる。

バラツクの人を思ふ

麻布區 麻布尋常小學校

第四學年女

八角 叡子

春どはいひながら、まだずるぶん寒うございます。あの焼跡にバラツクを建て、住まつてゐる方々は、さぞお困りでせう。障子や、からかみや、たゞみもなく、お家もすきまが多くて寒い風が、えんりよなく吹き込んで、夜もろく／＼ねられないでせう。

私も一度焼跡を見に行きましたが、それはそれは哀れな有様でございました。あんなにりつぱだつた大東京も二日二晩の中にめちやめちやになつてしまひました。ほんとに天災にはかなひません。しかし東京の人の元氣は大へんなもので、此の頃はごん／＼家も建ち、地方にちらばつた人々も、ぞく／＼かへつてまゐります。此の分で行くならば、以前にもました、りつぱな大東京が出来るのもまじかいことませう。それにしても私達は焼けもしないで、もとのちやんとした家に居て、安樂にいらしてゐるのは何といふ幸なことませう。

私達もどうかしてあのお困りの方々をお助けしてあげたいのですが、まだ子供ですから何もすることは出来ません。

ほんたうにバラックにおすまひの方は、お氣の毒なことだと思つてゐます

鳥にも情

麻布區 南山尋常小學校

第四學年男

風見金之助(十二才)

此の間お父さんの言附で、片町へ使に行つた。

その歸りに鳥屋さんにかつてある雀の前で、雀を見て居ると七匹居る内、一匹の雀を五匹でいちめる。後の一匹の雀はちつと其の様子を見て居る。

いちめられて居る雀は、『ちゆう／＼。』悲しさうに鳴いて居るのに、外の雀は平氣でいちめる。

やがて外の雀は、さん／＼いちめて木に止つた。ちつと見て居た雀も止つた。かはいさうにいちめられた雀は、もう止まる場所がないので、下の方でしよんぼりしやがんで居た。するとちつと見て居た雀が、急に羽ばたきをした。さうして止つて居た場所をどいた。多分『こゝへ止まれ。』と言ふのだらう。下に居た雀は喜んで、その木へ止つて、『ちゆう／＼。』鳴いて禮を言つてゐた。

あゝ何と言ふ美しい情を持つた雀だらう。そう言ふ雀が若し人間だつたら、どんなに良いだらう。雀になどして置いては、もつたい無いと僕は思つた。

髪

結

麻布區 南山尋常小學校

第四學年女

小野愛子(十二才)

此の間のお晝すぎに妹が、

妹『髪を結つて、ちやうだいな。』

私はたいくつでくたまらなかつたので、

私『え、結つて上げるわ、くしとお湯を持つて来て下さいね。』

妹『はい。』

間もなく妹はくしとお湯を持つて来た。

私『さあちやんとおすわりしてね、あらあんまりかたくならなくてもいいことよ。』

妹はおしやれなものでちやんとすわつてゐる。

私『どういふ様に結ぶの。』

妹『かうやつてね。横で結んでリボン着けてちやうだいな。』

私は一しやうけんめいに髪を結つてやつた。やつと髪が揃つたと思へば又ばらく

になつてしまふ。困つてしまつて妹の毛をぎゆうつと引張てやつた。妹は大そう驚い

たやうな顔をして、

妹『どうしたの。』

と聞いた。私は

私『今ね、結ばうと思つたらもつれてしまつたのよ。ごめんなさいね。』

と言つてだましてしまつた。妹は

妹『え、いゝのよ。いたくなかつたわ。』

私は引張つてしまつて大そう妹にすまなく思つたので、

私『ごめんなさいね。』

と幾度もあやまつた。そして今度はこん氣よく、まづく結へたらほどいたりしてや

つと横だけを結んだ。

私『今度はリボンをかけるのね。』

妹『え、ね、桃色がいいの。』

私はリボン箱から桃色のリボンを出して来た。妹は先からうれしさうな顔をしてゐるが、前よりなほうれしさうである。私は妹の氣に入る様に美しく結んでやつた。妹は鏡を見てゐたが氣に入らないやうな顔をして

妹『もつといゝ様に結べない。』

私『だつてこれでもいゝでせう。あんまりむりぢやないの。』

妹『だつて。』

私『では結びなほして上げるわ。』
妹『え、結びなほしてちやうだい。』
私はやつと結びなほしたので、
私『さあ、結べたわよ。遊びに行くなら行つていらつしやい。』
妹『え、』

妹は鏡の前に立つてさうして禮を言つて遊びに出かけた。私はほつとため息をついた。

雨 だ れ

麻布區 飯倉尋常小學校

第四學年男 北原 哲夫 (十一才)

(一) 今日雨降り大雨だ

のきばの先のちやうちんが
あつちの方でもきいらきら
こつちの方でもきいらきら
ほんとに明るい雨だれちやうちん

(二) 今日村のお祭りだ

おやねの上でおたいこが
あつちの方でもごんどごど
こつちの方でもごんどごど
ほんとにおもしろい雨だれだいたいこ

地 し ん

麻布區 飯倉尋常小學校

第四學年女 松浦 富子 (十一才)

秋のうららかな
皆で御飯ど
ごしんど大きな
お家がぐらぐら
外へ出やうど
かはらががらぐら
ま晝時
すはる時
音がして
うごき出す
した時に
落ちてくる

大きな家や
あつといふ間に
たゝないこしを
やつと外へ
又もぐらぐら
いきているこゝちも
下町方面
ごどんぐりと
二日二晩
焼野の原が

お店など
皆たふれ
むりに立て
出て見れば
ゆれだした
ない思ひ
火事と聞く
ひびく音
焼つくし
残るだけ

節分の夜

麻布區 三河臺尋常小學校

第四學年男

鈴木 武男

待ちに待ちかねて居た節分の日が来た。

うれしく思ひながら學校へ来たが、晩の事ばかり考へられて、ちつとも勉強の事は頭には入らない。一時間二時間と授業もすましていそいで家へ歸つて来たが、夜までは餘程の時間がある。

そろ／＼暗くなつたので豆をいつたり、おせつちを煮たりした。其の中に、

『福は内』 『鬼は外』

と言ふ聲がお隣から聞えて来た。

もう豆撒きをやり初めたのだ。その中に

『お風呂が沸きました』

と小さい兄さんが言つた。弟と大きい兄さんがお風呂へ入つたので、其の間に僕は御飯を食べてしまつた。おかあさんのお話に、

『今夜はお年取りと云つて、今夜のおせつちはお正月のお餅と同じで、それを食べるど一つ年を取るのですよ。』

とおつしやつた。

兄さんと弟がお湯から出たので、小さい兄さんと一しよに入つた。お風呂へ入つても豆撒きがしたくて、たまらなかつた。ところがあいにくお風呂の火が消えて居て、ぬ

るくて外へ出ることが出来ない。女中に火をもやさせてもう少し暖くなるのをまつてゐた。丁度よくなつたのでよく暖まつて出た。それから弟と二人で豆撒きをした。弟は『福は内』『鬼は外』

と三度云つて豆を撒くように教はつたのに、

『福は外』『鬼は内』
と言ひ違つたので家中大笑をしました。後で其の豆をめい／＼自分の年数だけを食べて、皆でにぎやかに話しながら面白く過した。

(一)

にぎやかな

せつぶんのよも

ちかづきぬ

(二)

にぎやかな

せつぶんのひの

おゝわらひ

(三)

にぎやかな

せつぶんのよも

すぎしかよ

報知新聞のまんぐわ

麻布區 三河臺尋常小學校

第四學年女

水谷 きよ子

私の家では報知新聞をいつも取つてゐます。その新聞は、朝と夕方と一枚づつ來ます。私は朝刊よりも夕刊の方が好きです。なせ、と言へば夕刊には『ノンキナ父サン』と言ふ題の、まんぐわが毎日のつて居るからです。

私は夕刊が來ると、外で面白く遊んで居ても、

『うれしいノンキナ父サンが來た』

と言ひながら、家の中へかけ込んで來る時などもあります。

そんな風に私は『ノンキナ父サン』がすきなので、一日でもそれを讀まない日は無い位のです。

それを讀んで見ると、或日『ノンキナ父サン』が子供をおすまふをとつて、自分のおかみさんに、

『遊んでゐる所ではありません』

と言つてしかられたり、又おそば屋の出前持になつておそばを頭の上のせて持つて行く途中で、届ける家を忘れて、又主人の所へ聞きに来てごなられたりして、一日でも面白く無い日はありません。

殊に土曜日の、夕刊には外のまんぐわとまぢつて『ノンキナ父サン』が出てゐるのです。そして私のすきな『ノンキナ父サン』は、土曜日であらうが日曜日であらうがかまひなしに毎日新聞にのつて來ます。

私の家は去年の大地震しんの日に焼けましたから、此の頃さびしく暮してゐますが、私には『ノンキナ父サン』がついてゐて毎日私をなぐさめてくれますから、家は焼けてもあまりつまらなくはありません。

『ノンキナ父サン』ばかりでなく、土曜日の夕刊に出る外のまんぐわまでが、私をな

ぐさめてくれますから、一週間の中、土曜日は私にとつては一番楽しい日であります。ですから土曜日の夕方は外へ出ないで、今來るか／＼と思ひながら夕刊を待ち暮します。

私は學校へ來る時に、毎日おべんとうを新聞紙で包んで來ますから、おべんとうをいただく時も『ノンキナ父サン』はやはり私をなぐさめてくれます。

『ノンキナ父サン』は私のだいすきな友だちです。

九月一日

麻布區 本村尋常小學校

第四學年男 高橋 眞次

九月一日は僕等の忘れる事の出來ぬ日である。丁度午前十一時五十八分であつた。何處の家でも御飯を食たか食ないかその時に、地面が『ごーつ』と鳴つたかと思ふと見る間に大地震があつた。誰も皆初めは大地震とは思はないから、大抵の人は内に居たが、二度三度とゆれる内皆は驚いたので皆外へ出た。僕も驚いたが出てもための時はだめだと思つて、出ないで後で出た。その日は馬鹿に暖かすぎたので大抵の人はうす

着して居た。僕はおまけにまつばだか猿股一つでシャツ一枚さへ着てゐなかつたので着物と帯とを外へ出して外で着たら、後で皆に笑はれたが、何分急な場合なので仕方がない。その内高輪の御所が『ごんごん』と爆裂の音が聞えて、晝でも火がよく見えて居た。それから目黒火薬庫方面からも警視廳方面からも、もくもくと黒煙が上つたと同時に空が赤くなつた。まだ時々大きくゆれる。火事は段々近よつて来る。人々は不安の中に野宿した。

バラックに住む春子さんに

麻布區 本村尋常小學校

第四學年女 平井神子

春子様

思ひだしても恐ろしい九月一日の大地震大火災の時に、私はあなたの事がしんばいでならなかつたのでしたが、あの〇〇のさわぎの二日の夜、あなた一家が私の家へ逃げていらつしやつた時は、私もあなたも泣いてよろこびました。その後バラックがたつて、お歸りになつた時、私は春子様の學校の事が氣にかかつて、毎晩よくねむれま

せんでした。せんじつの御手紙で、あなたの學校のお机がみかん箱であることや、むしろの上ですわつておけいこをすることや、お勉強時間にごほりが見えたりする事を、おきき致しまして、家も焼けないし學校もりつばな私の身に比べまして、ほんたうにおきのごくに思ひます。さぞバラックはお寒いことでせうね。雪や雨が降つた時は、ごんなにおこまりであらうと、おさつしします。よく氣をおつけになつて、おからだをだいにさいませよ。一日一日と、帝都も復興いたしてをります。間もなくあなたの學校も、りつばになつて、お勉強も出来るやうになることでせう。日曜日にはお遊にいらつしやませ。そしてつもるお話を致しませう。おち様おは様に宜しく。さようなら。

二月二十一日

神子より

春子様へ

綴方のだいをさがすまで

麻布區 筭尋常小學校

第四學年男 吉田隆一

『ボウ……』。ビール會社の七時の汽笛に呼びおこされて、僕はしぶく床を出た。起きて、『僕は困つたなあ、綴方になにを書かう』とつぶやいた。そして色々考へたがうまくいかなかつた。

家を出て學校へ行く道でも道々考へた。『何を書かうか、』あれにしよう、いやこれにしよう』と。それでもいくら考へても氣にいつたのが出來ない。だいが無かつたり、終の方がめちやくちやになつたりして、皆だめになつてしまふ。僕はあせり出したがいくらあせつても、同じ事だつた。

學校に行つても何んだか心がかうかない。いつも面白い人取まで何んだか面白くない人取をやつてる所へ松永君が來た。『松永君、君綴方のだいを考へた?』『うん僕だめになつちやつた。きのうの何んだかへんだからよしした吉田君は?』『僕もだめ何を書いてよいのかわからなくなつちやつた。』『そう和田君もだめになつちやつたつて、』『和田君も、それちやあみんなだめになつたの、八太君は?』『さあまだ來ていなから聞いてみなくちや、わからないや』『まだ來てない、それだけれど先生、急に書けつて言ふのなもの、出來ないのあたりまへだねえ』『うん今度の土曜までなら書けるけれどもねえ』『うん』

かねがなつて教室へはいつても、その事ばかり考へてろくに勉強が出來なかつた。家に歸つても心配で仕方がない。『いいだいがないかなあ』といつしやうけんめいで考へた末やつと『ああそうだ。今までの事を書けばよい』と、氣がついた。それとどうじに、今まで曇つてゐた僕の心は急に喜びにかはつた『あしただす綴方のだいが出來た。あゝよかつた』と僕は心の中でさげんだ。暖かい日の光が僕の體を一面にてらしてゐた。

せつぶん

麻布區 筭尋常小學校

第四學年女

岩淵 和子

二月四日はせつぶんであつた。弟は朝から、『今日はいまめまきだからうれしいな』と言つて居た。

私が學校から歸ると、大きい弟が、『和子ねえさん豆まきはまだ』

と聞いたので、私は

『豆まきは夜よ』

と言つたら、つまらなさうな顔をして、

『そう』

と言ひながら向ふへ行つてしまつた。しばらくたつてからおことのわけいこに行くとお子さんが、

『鬼が居るからこはいよ』

と言つて居たので、私が、

『なせ』、

と聞くと、

『だつて今日豆まきだもの』、

と言つたので、私は

『そう〜』

と言ひながら家へ歸つた。

いよ〜夜になつた。神棚には栴があげてあつた。夕飯がすんでみんなおふろに入

つてから、お兄さんが大きな聲で、

『福は内鬼は外』

と言つて、豆まきをなさつた。私はおねえさんと一しよに晝間作つて置いた袋の中にひろつては入れ、ひろつては入れたりした。

お兄さんが

『もう、まく所はないかな』

とおつしやつたら、お母様が

『まだ便所をまきませんよ』

とおつしやつたので、お兄さんは、

『そうですか』

と言ひながら、

『福は便所』

と言つたのでとつと笑つた。

豆まきがすんでから、みんなこたつにあたりながら、さつき拾つて置いたお豆を、自分の年だけ、いただいた。私はねる時、

『今日はバラックの人も豆をまいたかしら』
と思つた

翌日は道に豆が落ちて居た。

震災當時

麻布區 麻中尋常小學校

第四學年男

潮田 芦彌

九月一日のお晝だつた。僕は御飯を半分ばかり食べかけるとミシ／＼と天井の上で人が歩いてゐるやうな音がしたと、思ふまもなく、ギク／＼ミシ／＼と、家は今にもたほれるかと思ふほどゆれ出した。

初はいつもの地震だと思つて居たのに、だん／＼大きくなつてきて、向ふの家の屋根のかわらが、がら／＼落ちて来る。僕は大地震だと思ふと、急にこわくなつて、はだして庭へ飛び出したが、地面が上つたり下つたりして、とてもむづとして居られない。すると、お母さんがたんすの前で、呼んでゐるので又そこへ行つて、お母さんのそばへ座つた。地震がおさまつてからあわてて外へ出た。

僕は外へ出てホツと安心した。ござやふとんを、持つて近くのひろばに行つた。近所の人、皆青い顔をして集つてゐる。その時遠い南の空からは、眞黒な煙がもく／＼と上つてゐた。

その間にも地震は時々ゆれる。それまでは、まさかこんな事にならうとは思つてゐなかつた。夕方には黒煙が四方から上つてゐた。恐ろしい爆發の音が聞える。かた方はもう巴町まで焼けて來たと言つて、下町の人がどん／＼僕の家の方へ荷物をはこんで來る。

僕はこのなつかしい我家が、このまま灰になつてしまふのかと思ふと、悲しくて恐くてゐても立つても居られないくらいであつた。

火はますます近づいた。僕はお母さんに『早くにげませう』とせがんだ。そろ／＼方々の家では、逃げ初めた。僕の家でも荷物を持つて、裏の宮様にひなんした。時はちやうど、午後十一時頃であつた。僕は晝からのつかれで、こわいのもわすれてぐつすり眠つてしまつた。翌朝になつて目をさますと『火はきえて家は焼けなかつたよ。』と言ふお母さんの聲を聞いたので、飛び上つて喜んだ。僕は安心して家に歸つた。下町を見ると、昨日までのきをならべた店々が、一晚のうちになくなつて、今は見渡す

かぎり焼野原となつてしまつた。

か　る　た　會

麻布區 麻中尋常小學校

第四學年女

湯　田　京　子

私達が待ちに待つた正月が來た。

うちでは二日の晩、かねて用意してゐたかるた會をした。

大勢の人がよつてたかつて札を取らうとしてゐる。ひつかゝれて『あいたつ』といつてゐる人がある。私もそのうちの一人である。

讀手が『いにしへのならの都のやへざくら』といふと、それをねらつてゐた私は『はい』といつて勢よく取つた。すると、そのおはこの堀内さんのお兄様が『京子さんだからけふこのへを取るのだ。』とまげをしみをいつた。

又讀手が『あまつかせ』といふと、今度は見事堀内さんにとられてしまつた。

おゝくやしい。今度こそはと思つてじつと、堀内さんの札をにらんでゐると、讀手が『これやこの』といつたので、さあ、私のおはこだと思つて、堀内さんの前の札を

はらはうとするどこれはしたり『久方の』なので、私は御手附をしてしまつた。すると後藤さんのお兄様が『御手附だッ』といつて、おしろいのふくんでゐる筆を目の前に、にゆつと差出した。

しばらくしてのち、見つともない顔や面白い顔がたくさん揃つた。

お母様とねいやが、おいそがしそくに御菓子やおみかんを運んで下さる。

次の合戦が始つた。みんなが負けまいとにらみ合つてゐたやさき『いたいッ』といつて泣き出した。それは關さんのお兄様が『大江山』を取らうとして、妹の手をひつかいたのである。私が『律子さん、おみかんを上げるから泣いちゃだめよ』といふとお父様も『律子さん、泣くんじやあない』となだめなさる。折しも讀手が、みかんをしゃぶりながら讀み上げた聲がおかしいので一度にぎつと笑つた。妹も笑ひ出した。コーヒーやごちさうがすんだのちお母様もお仲間にはいつて下ださつたから、ますますにぎやかになつた。

かるた會の終つたのは十一時すぎであつた。

九月一日の事

麻布區 東町尋常小學校

第四學年男 神戸 莊 二

九月一日の朝は曇つてゐた。この日は東京市中の小學校の初の日であつた。私は勇んで學校へ行つた。學校では校長先生の話を聞いて、教室へはいつて、すぐかへつた。それから約一時間ばかりたつとぐらくとゆれた。私は小さい地震だと思つてゐた。その内にぐらくとみしくと云ふ恐しい音がした。又も二へんうごいた。今度は一度めよりもづつと大きくゆれた。

隣の家では皆んな外へ出てしまつた。私はすこしたつてから外へ出て見ると皆んな青い顔をして『大きい地震だつたね』と言つてゐる。私は櫻田さんの家の方へいつて見ると櫻田さんも、櫻田さんの内の人皆んな外へ出てゐた。その内に東宮御所の方角から煙が出た。

私は六時頃まで外にいた。その内に京橋の工場の人皆んな來た。一日の夜はまるで晝のやうだつた。

大地震の思出

麻布區 東町尋常小學校

第四學年女 大栗 スミ子

ああ思ひ出しても、あのおそろしい大正十二年の九月一日。それはぐくおそろしい大地震のあつた日でございます。そんなことはゆめにも思はないで、私たちは學校の始まるのをうれしく思ひながら、學校へ行つたのでございます。學校も早く終つたので、早く家へ歸り、おひるの御食事でもしようと思つて居ります。とつせん『ゴウ』といふ異様な物音と共にぐらくと家がゆらぎ出しました。其のせつな、たなの物が上からおちてくるのでこれは家に居てはあふないと思つて、急いでお庭へはだしのままむがむちうで飛下りました。その内震動はますますはげしくなつてきて瓦はばら／＼とおちてきます。もう私は生きた心地もなく、お庭の中で一番太いもみぢの木につかまりながら、お母：お母様：だい：だいちやうぶ』と、ごもりながらふるへる聲をおししづめ、やつとそれだけ言つただけでした。私はもうこれだけ言ふとあとはむねが一つぱいになつてしまつて、何も言へなくなつてしまひました。その内にある程強かつた大地震もやうやくやみました。それで私たちもほつと、一息ついたかつかない内方々から恐しい火の手が上つて、さしも廣い大東京の空をつつんでしまひまし

た。この火災のために家は焼かれ、両親をなくした人々は少くはありません。又十萬餘人の人がひがうなさいごをこげた事は、まことにおきのごくなことでありませう。私たちは山の手に棲んでゐたため幸にもこのさいなんをきりぬけてぶじに残ること出来たのはごんなに喜ばなければならぬでせう。ああ九月一日、九月一日は私たちにとつてえいきゆうにわすれえない日でございます。

ちしんの時

麻布區 絶江尋常小學校

第四學年男

富岡 秀雄

きよ年の九月一日の話を聞いてもぞつとする位であるし、ちしんの時僕は活動へ行つてゐた。すると急にあのちしんが來たのでした。僕はふだんちしんなど、こわくなくと思つてゐたけれども、何んと思つたのか急にかけたしはじめたが、古川橋まで來るとやんだが、僕はごんな大きなぢしんでもゆりかへしなど來るとは思はなかつたからまづこれでひと安心したと思つてゐると、こんどはゆりかへしが來たのでこれは大へんだと思つてまたかけはじめたがむちうであつた。かはらはおちる家はたふれる、

人はかけだす、大へんなさはぎ、僕の家はどうだらうと思つて家へ來て見ると、かべが落ちてゐたり、たなが落ちてたりしてゐた。その時、僕のお母さんは病氣だつたので、お父さんがおぶつて、お寺の庭へひなんした。

配給品

麻布區 絶江尋常小學校

第四學年女

小西 コト

私の家はもと淺草みよし町七十一番地でございましたけれども、去年の九月一日のぢしんにみんな焼けてしまへましたので何もありません。寒くなつてもきるものさへありません。時々よいきものをきてあるく人があると、うらやましいこともあります。家は焼けたけれども焼けない學校へ入りましたから、勉強が出來て仕合でございます。其の上私の學校では焼けてこまつた人にマントを下さいました。家にもつてかへりましたら、お母さんは『お前は仕合せだ』と大へんよろこびになりました。外に『オモチ』やわるのじゆばんや帳面や色々學校からいただきまして、家では皆ありがたいくといひましてよろこんでゐます。それですから私は一心に勉強してりつぱな人に

なりたいと思つてゐます。

火事の さうざう

赤坂區 赤坂尋常小學校

第四學年男 駒形進也

九月一日の大地震とともに起つた火事が東京市中を焼きつくしたのだ。僕の家も其中の一つなのだ。どん／＼燃えるのろひの火を僕は見た。しかし惜しい事に僕の家が焼けるのは見なかつた。せめての名残にあの住なれたなつかしい家の焼け落ちる最後の様子が見たかつた。いや焼くのが惜しかつたのだ。僕は家の焼けるのを心の中で考へて見た。確裏から燃えて來たのだつた。あの廣い臺所の板の間や、あの座敷の畳までがいつたいどんなに燃えたのだらう。板の間をどん／＼燃したのであらう。焚火の様であつたらうか。廣い畳はどうしたらう。どんなにほひがしただらう。思ひ出す度にぞつとする。こわくてもその焼け落ちる最後が見たかつた。

恐しい九月一日

赤坂區 赤坂尋常小學校

第四學年四組女 金子登女子

大正十二年九月一日は何といか恐しい日であつたらう。東京市の人々が、家を焼かれ幾萬の人間までが焼かれてしまつたのである。その日はちやうど學校の始業式なので私達は式をすませて、いつもより早く家に歸り皆で楽しい晝の膳に向つた。何分かの後に恐しい大地震があるとは夢にも知らなかつたのである。その時である。突然家がぐら／＼とゆれだした。『あつ地震。』と思ふ間もなくなから物が落ちる音、かべがくづれるすごい音などが一つしよに、皆の耳にひびいた。少し地震がしづまつたので外へ飛び出すと、田町の方から眞黒な煙がもく／＼と上つて、それがだん／＼に廣がつて來る。『火事だ。々々々。』と言ふ聲が方々から起つて來た。地震でみんな外に出てゐる中を自動車を通る。兵隊が通る。馬が通る。通は大へんなこんざつであつたそのこんざつの中をカバンや人形などもつて、私達は皆豊川様へにげて行つた。焼かれてしまふかと思つたが幸に風向がかはつて火は溜池の方へ行つてしまつた。その夜はくたびれては居たが心配でおち／＼ねむれなかつた。翌朝通を見ると、家をつぶされ、家を焼かれた氣の毒な人々が、つるをたよりに、とぼ／＼と山の手をさして、